佐土原町文化財調査報告書第８集

隠山（かくれやま）遺跡概要報告書

船型光背（薬師如来）

1993・12

宮崎県宮崎郡佐土原町教育委員会

序

佐土原町では、過去の先人達によって多くの歴史の足跡が残されています。特に古代から近世にかけては、宮崎県においても中心的な役割を果たしてきました。これには立地条件として、宮崎平野の中央にあり、北面には一ツ瀬川が流れているなど生活を営むのには好都合な条件が揃っていたことによります。西都市寄りの船野台地には、船野型と呼ばれる全国指標の細石核が出土しています。日向灘近くに形成される佐土原丘陵には、下那珂貝塚から多くの弥生土器が出土し、また古墳時代には、土器田横穴が何百基単位で群を成していました。古代になると上田島丘陵周辺に国府・国分寺への須恵器・瓦の供給窯が奈良・平安期に渡って広範囲に出現します。

中世・近世では、当時日向を治めていた伊東氏及び島津氏の主城であった佐土原城・諏訪城があり、その付近では、苗代川焼物稽古所が営まれていました。

このように佐土原町では、日向の歴史を語る上で欠かすことができない貴重な遺跡が多く点在しております。今回報告いたします隠山遺跡は、下村窯跡に隣接する縄文草創期から中近世に至るまでの複合遺跡です。今後、窯跡との関係を含めて本報告の成果がまたれるところです。

最後に、調査に当たりまして県教育委員会はじめ[redacted]及び下村地区、作業員、町民の皆様のご理解とご協力いただいたことに対し厚くお礼申し上げます。

平成 5 年 12 月

佐土原町教育委員会

教育長　小　野　　勝

例　　言

1. 本書は、[redacted]株式会社によるゴルフ場建設に伴い、事前発掘調査を実施した隠山遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は、佐土原町教育委員会が主体となり、社会教育課主任主事木村明史が担当した。
3. 調査組織は次の通りである。

調査主体	佐土原町教育委員会	教育長	小野　勝
		社会教育課長	関屋紀久男
		同課長補佐	斉藤成實
		庶務主幹	関屋文子
		臨時職員	日野良子
特別調査員	福岡大学人文学部教授		小田富士雄
調査指導	宮崎県文化課主査		長津宗重
調査補助員	別府大学		金丸武司

作業員　[redacted]

整理員　[redacted]

4. 縄文草創期の集石遺構の切り取りを県文化課　吉本正典主事に依頼した。
5. 地質に関する指導は、元県文化課　宍戸　章氏による。
6. 土器群の色調は、農林省農林水産技術会事務局監修の標準土色帳による。
7. 出土遺物は、佐土原町教育委員会で保管している。
8. 本書の執筆・編集は、木村が当たった。

本　文　目　次

序
例　言
第Ⅰ章　はじめに …… 13
　調査の経緯 …… 13
第Ⅱ章　発掘調査の概要 …… 16
　1．遺跡の立地と環境 …… 16
　2．調査の概要 …… 23
　　(1) 遺　構 …… 23
　　(2) 遺　物 …… 24
第Ⅲ章　ま　と　め …… 33

挿　図　目　次

第1図　下村窯跡調査地周辺の地形 …… 14
第2図　隠山遺跡の土層配置図 …… 15
第3図　隠山遺跡の試掘溝土層図 …… 17
第4図　隠山遺跡の試掘溝土層図 …… 19
第5図　隠山遺跡出土及び地形全景図 …… 21
第6図　隠山遺跡出土遺物実測図(1) …… 26
第7図　隠山遺跡出土遺物実測図(2) …… 27
第8図　隠山遺跡出土遺物実測図(3) …… 28
第9図　隠山遺跡出土遺物実測図(4) …… 29
第10図　隠山遺跡出土遺物実測図(5) …… 30

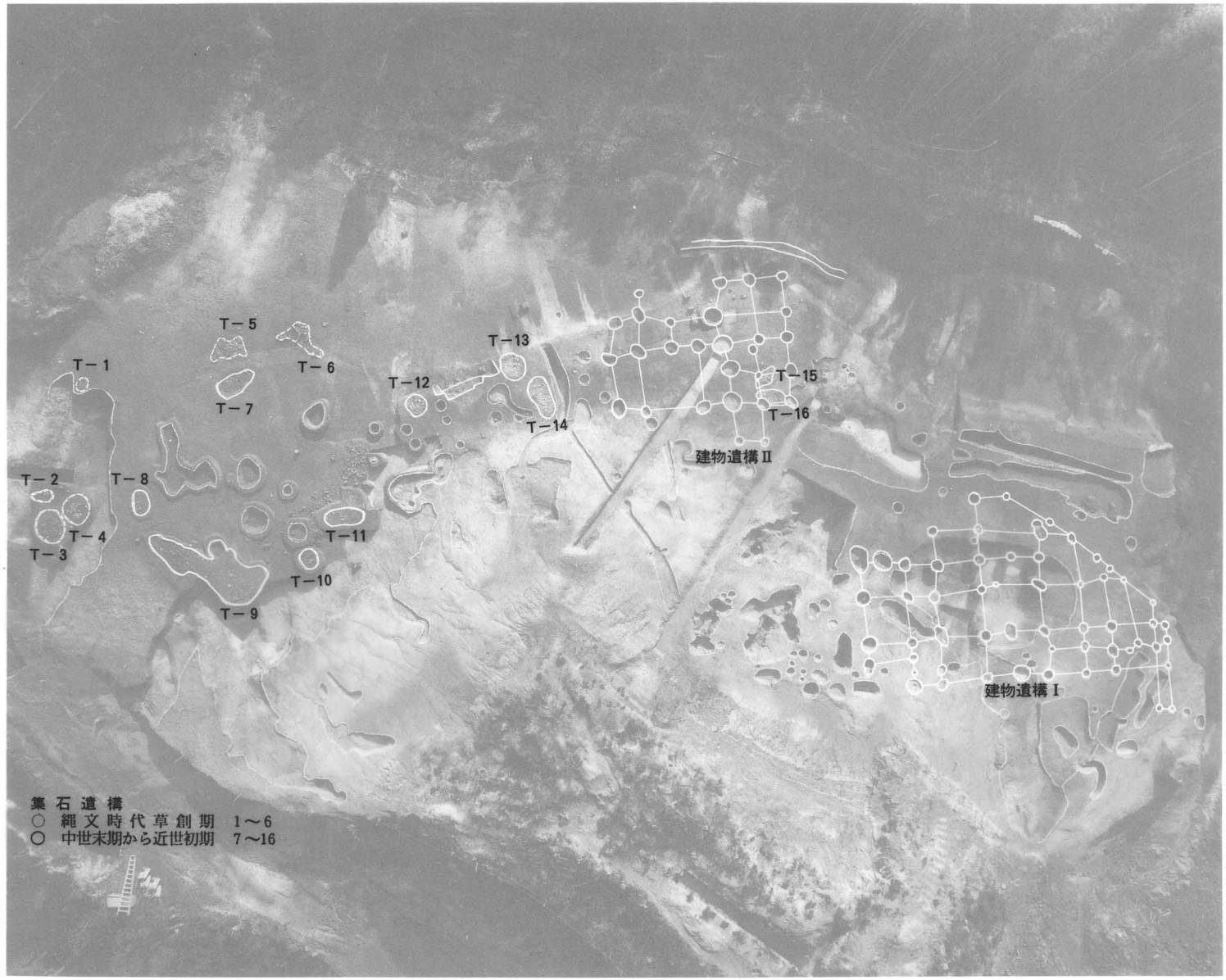
表　目　次

表1－(1)　隠山遺跡遺物観察表 …… 31
表2－(2)　隠山遺跡遺物観察表 …… 32

図　版　目　次

図版１　隠山遺跡全景写真 …… 1
図版２　真　　上 …… 2
図版３　建物遺構Ⅰ・Ⅱ …… 3
図版４　集　石　遺　構 …… 4
図版５　縄文草創期集石切り取り作業風景 …… 5
図版６　発掘作業風景 …… 6
図版７　出土遺物（石　器）…… 7
図版８　出土遺物（石　器）…… 8
図版９　出土遺物（土　器）…… 9
図版10　出土遺物（陶磁器）…… 10
図版11　出土遺物（　瓦　）…… 11
図版12　出土遺物（瓦　堂）…… 12

隠山遺跡全景写真

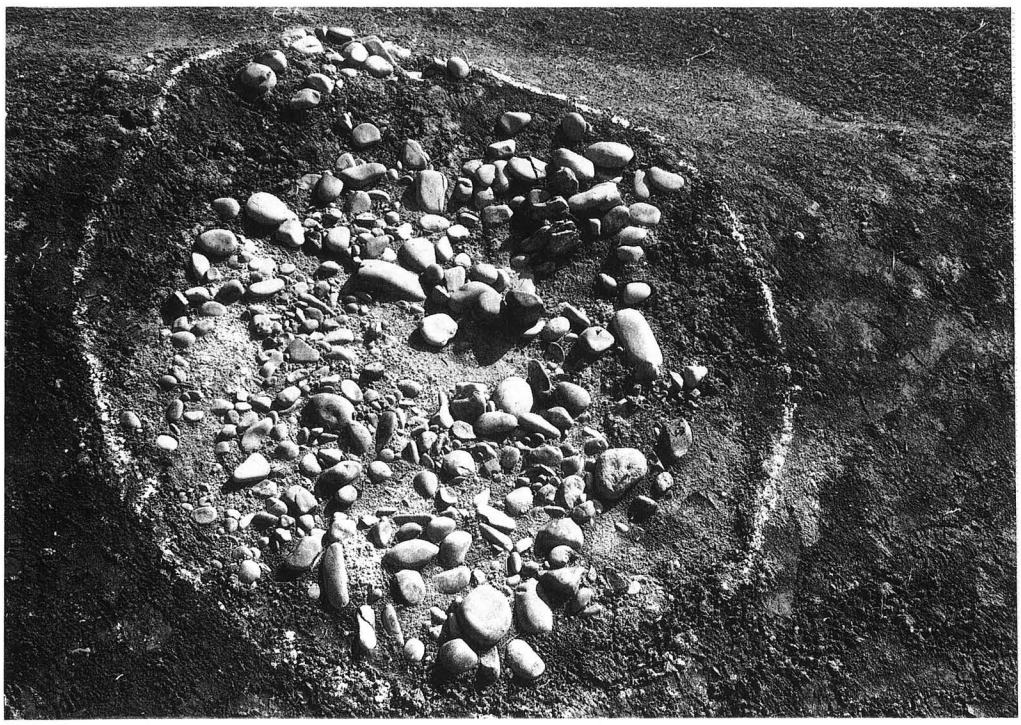

T－1
T－2
T－3
T－4
T－5
T－6
T－7
T－8
T－9
T－10
T－11
T－12
T－13
T－14
T－15
T－16
建物遺構Ⅱ
建物遺構Ⅰ
集石遺構
○ 縄文時代草創期 1～6
○ 中世末期から近世初期 7～16

建　物　遺　構　Ⅰ

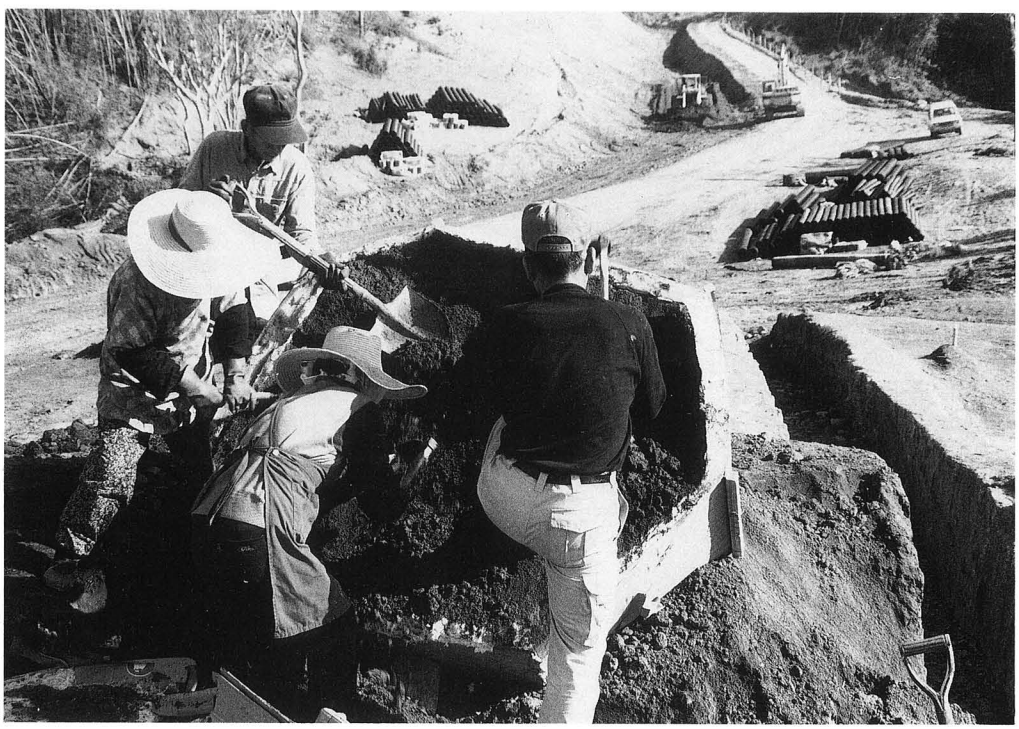
建　物　遺　構　Ⅱ

図版4

集石遺構（縄文草創期）



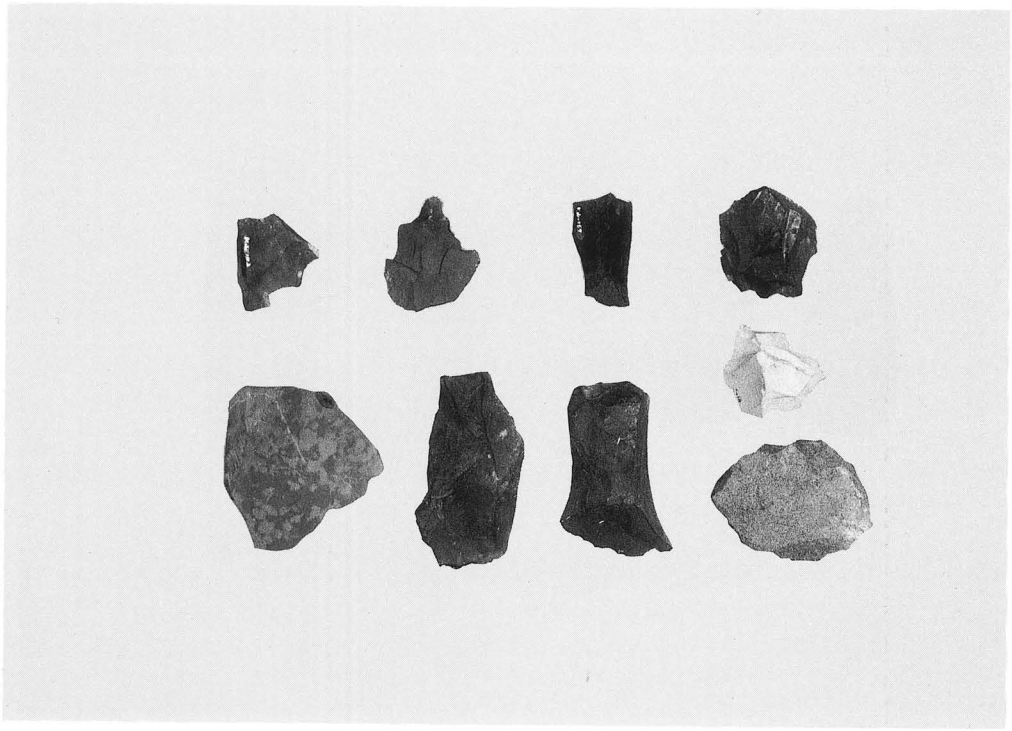
集石遺構（中世～近世）

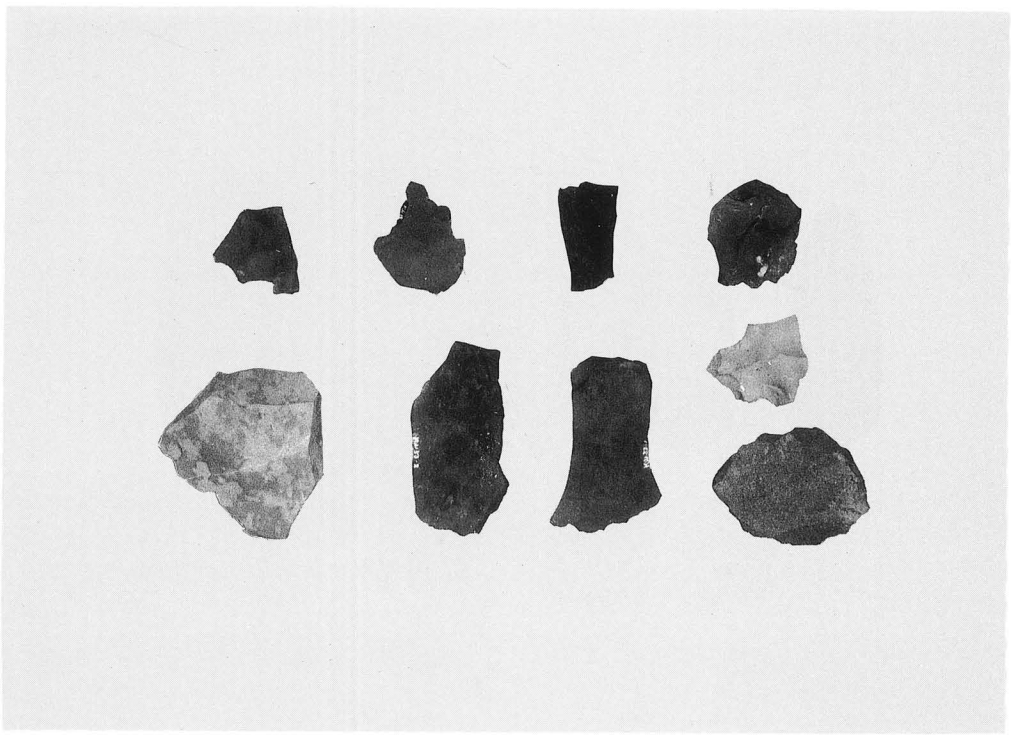


縄文草創期集石切り取り作業風景

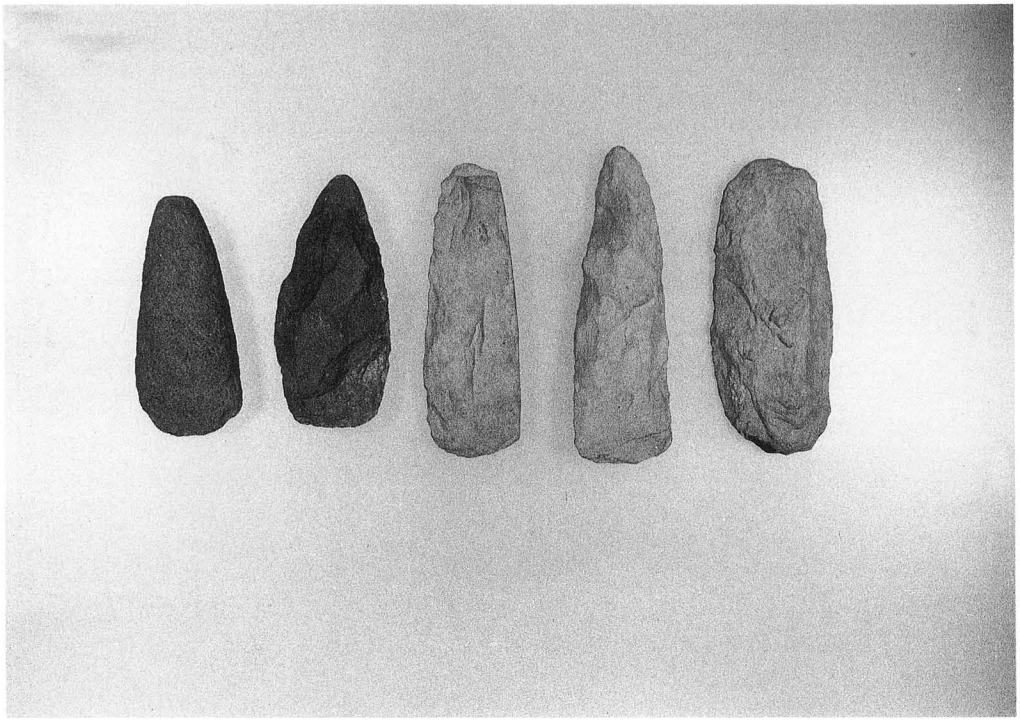
図版6

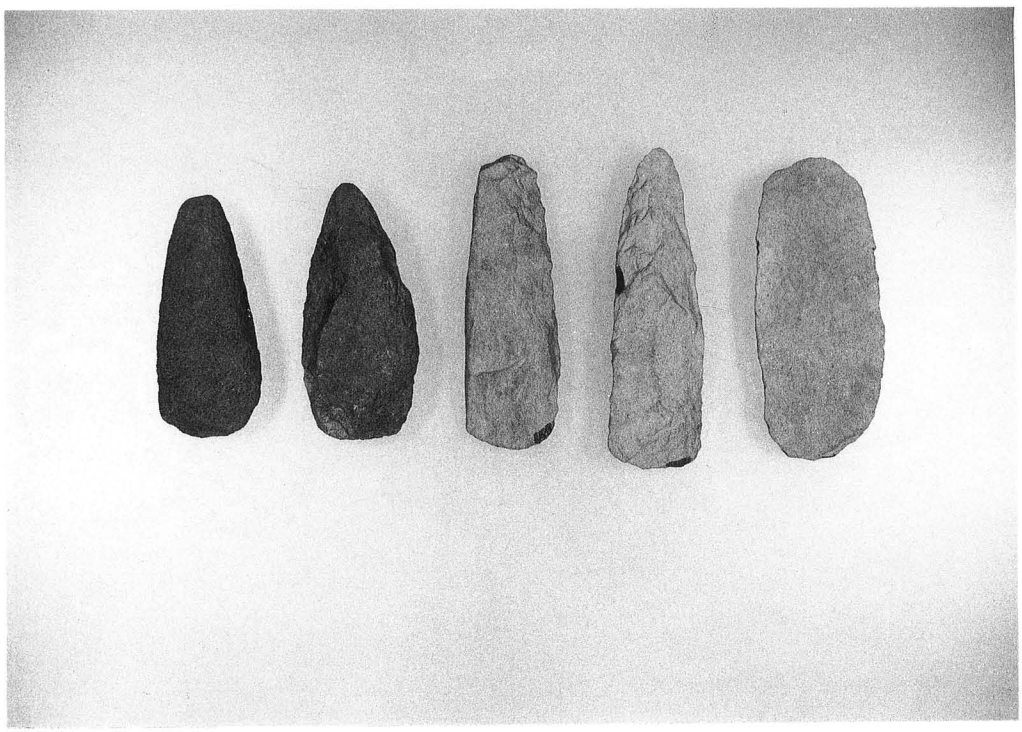
発掘作業風景



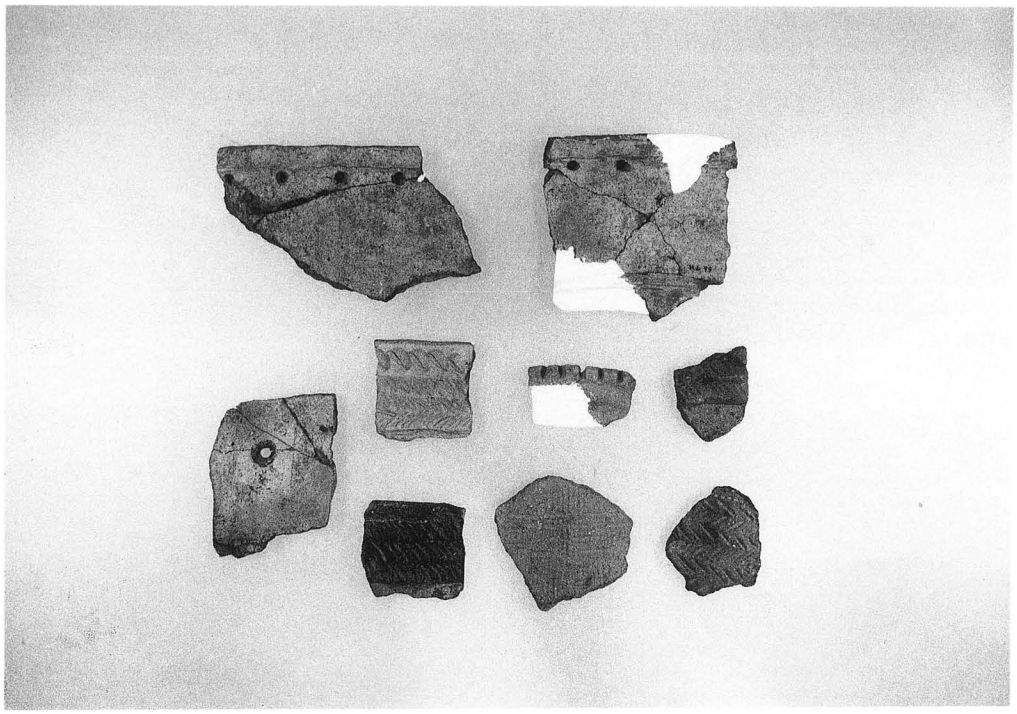


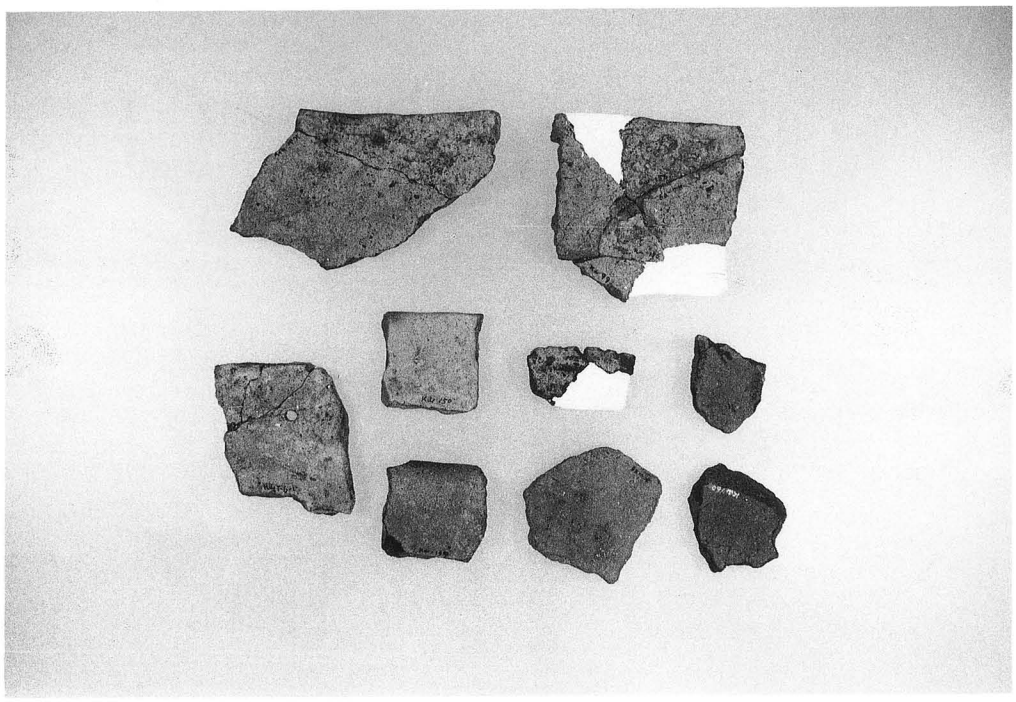
出土遺物（石器）





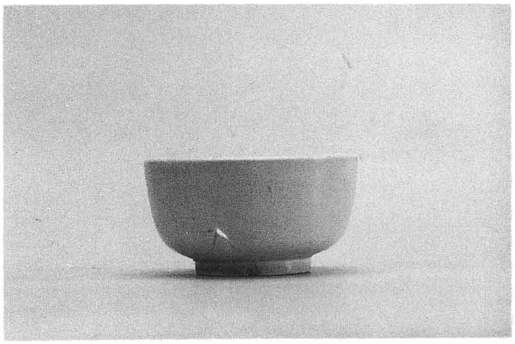
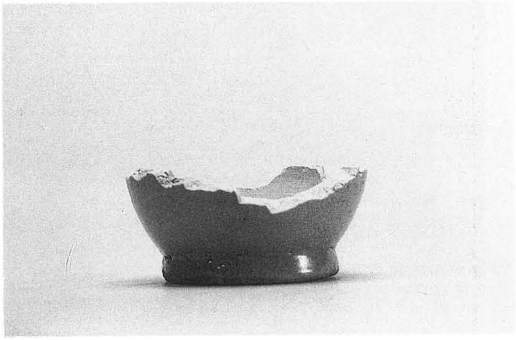
出土遺物（石器）

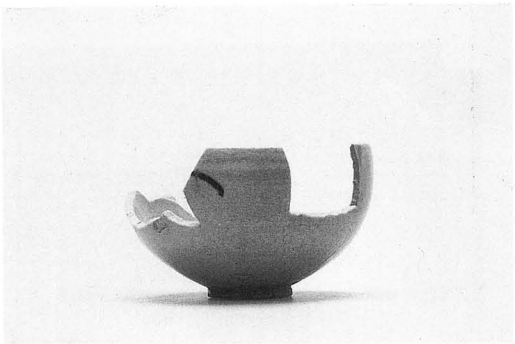
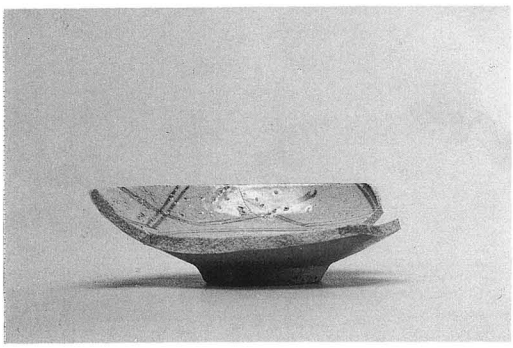




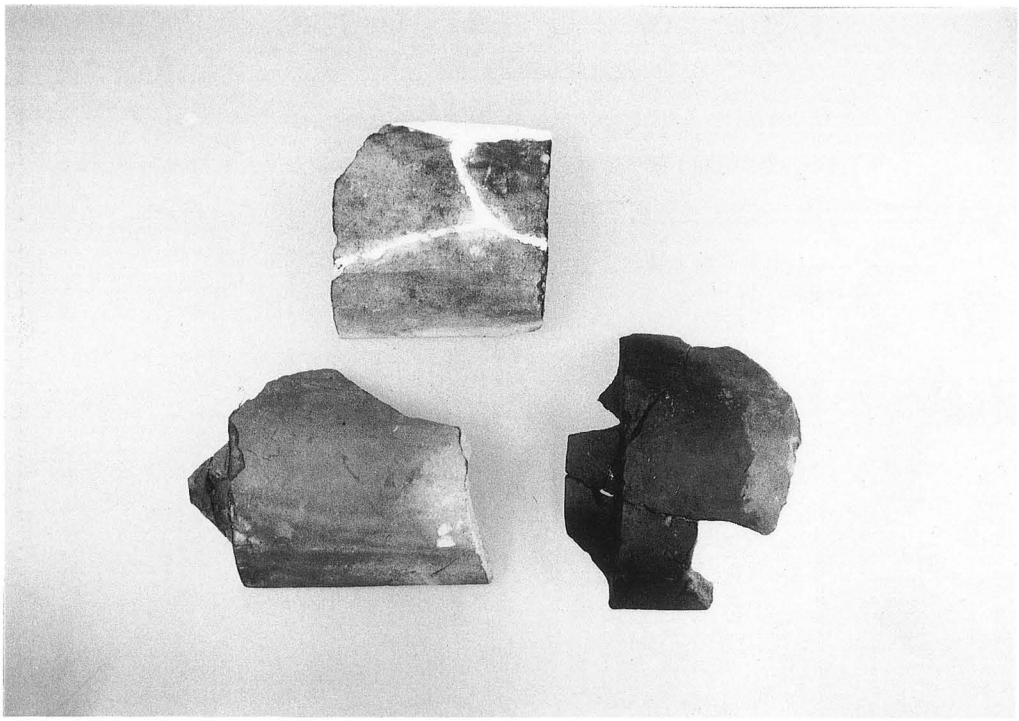
出土遺物（土器）

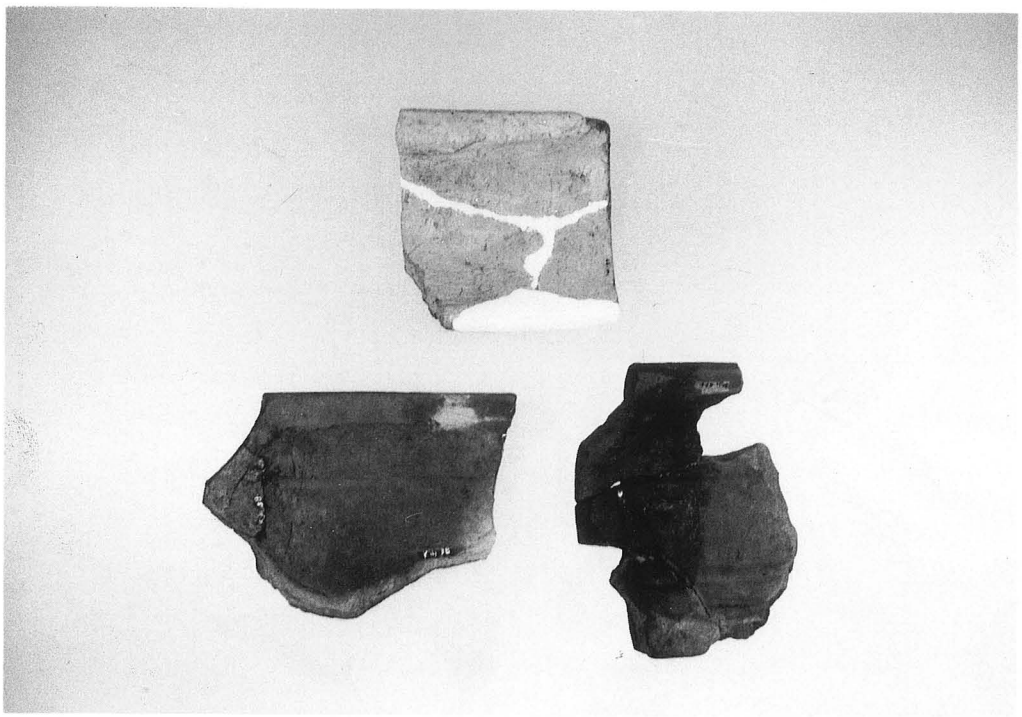
図版10

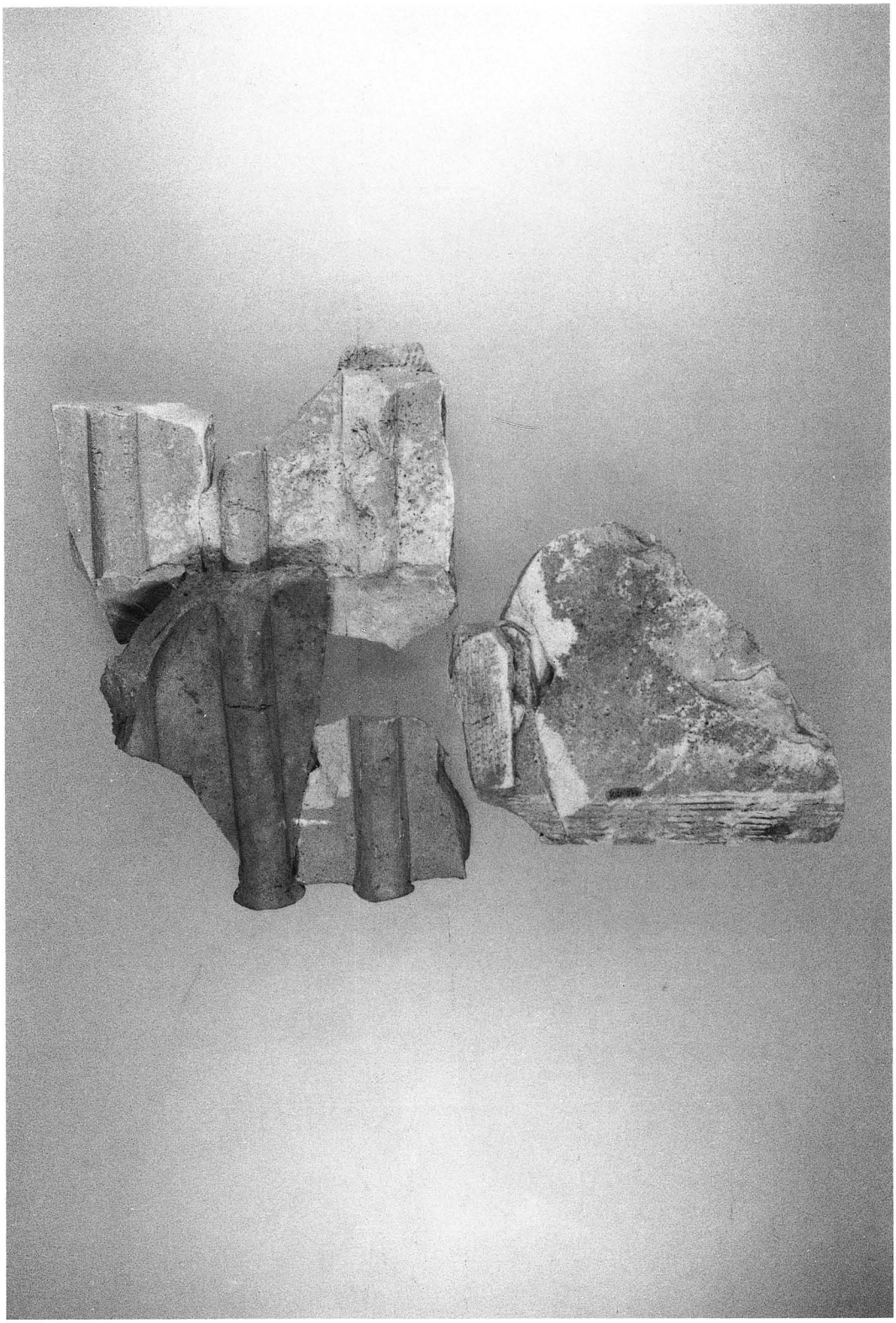
出土遺物（陶磁器）





出土遺物（瓦）

図版12



出土遺物（瓦堂）

第Ⅰ章　は　じ　め　に

調査の経緯

下村窯跡群の調査は、平成３年７月から平成４年３月まで第１回目の調査を実施した。その結果、Ｂ地区では灰原１箇所及び作業場１棟、Ｃ地区で灰原１箇所及び覆屋１棟、窯跡は、仮12号・仮20号・仮24号の３基が確認された。灰原からは、須恵器の壷・蓋坏・埦・甕・硯、または布目瓦等の多くの器種が出土した。

平成４年度は、４月に入って第２回目の調査を行った。まずＤ地区仮33・34・37・38号のグリット設定と遺構を掘り込んだ。平成４年５月11日隠山遺跡の試掘準備をし、トレンチを設定した。６月18日仮33・34・37号の窯体掘込みを行う。甕を主体とした土器が出土する。奈良教育大学長友恒人教授が仮33・38号に平成４年３月10日に埋め込んだ熱ミネッセンス法による放射能測定器用のパイプ各２本を６月25日に同教授によって抜き出す。その後、同窯跡から形式基準となる須恵器を選び送付する。９月下旬に中間報告をする。

７月21日、磁気探査で確認された窯跡と発掘調査で検出できた窯跡とかなり差があった。実際かかわった応用地質株式会社２名、磁気探査の日本における第一人者である奈良国立文化財研究所西村康室長、オブザーバーとして宮崎県文化課北郷泰道主査によって調査資料を検討した。その結果、砂岩・鉄分・火山灰が磁気探査機の反応判断を困難にしている。本来は、多く存在したであろう窯体も急斜面に築かれたのでほとんどが崩壊と思われる。磁気探査結果の総括については、下村窯跡本報告において西村室長が執筆する。

Ｄ地区を空中測量するために８月12日から清掃し、26日に実施する予定であったが、天候不順により９月２日に行った。

隠山遺跡は、８月27日から調査に入った。調査範囲は、痩尾根部に位置し5,000㎡程である。遺構検出作業が進むにつれ先人の生活跡が明らかになった。検出された遺構の主なものは、近世の寺院跡・墓、縄文草創期の集石、弥生期の集石等である。この地で数千年に渡る長い間、営繕作業や食生活の跡が蓄積され、今日の発掘調査によって姿を現したのである。そのひとつひとつは、現代人に何を語ろうとしているのであろうか。

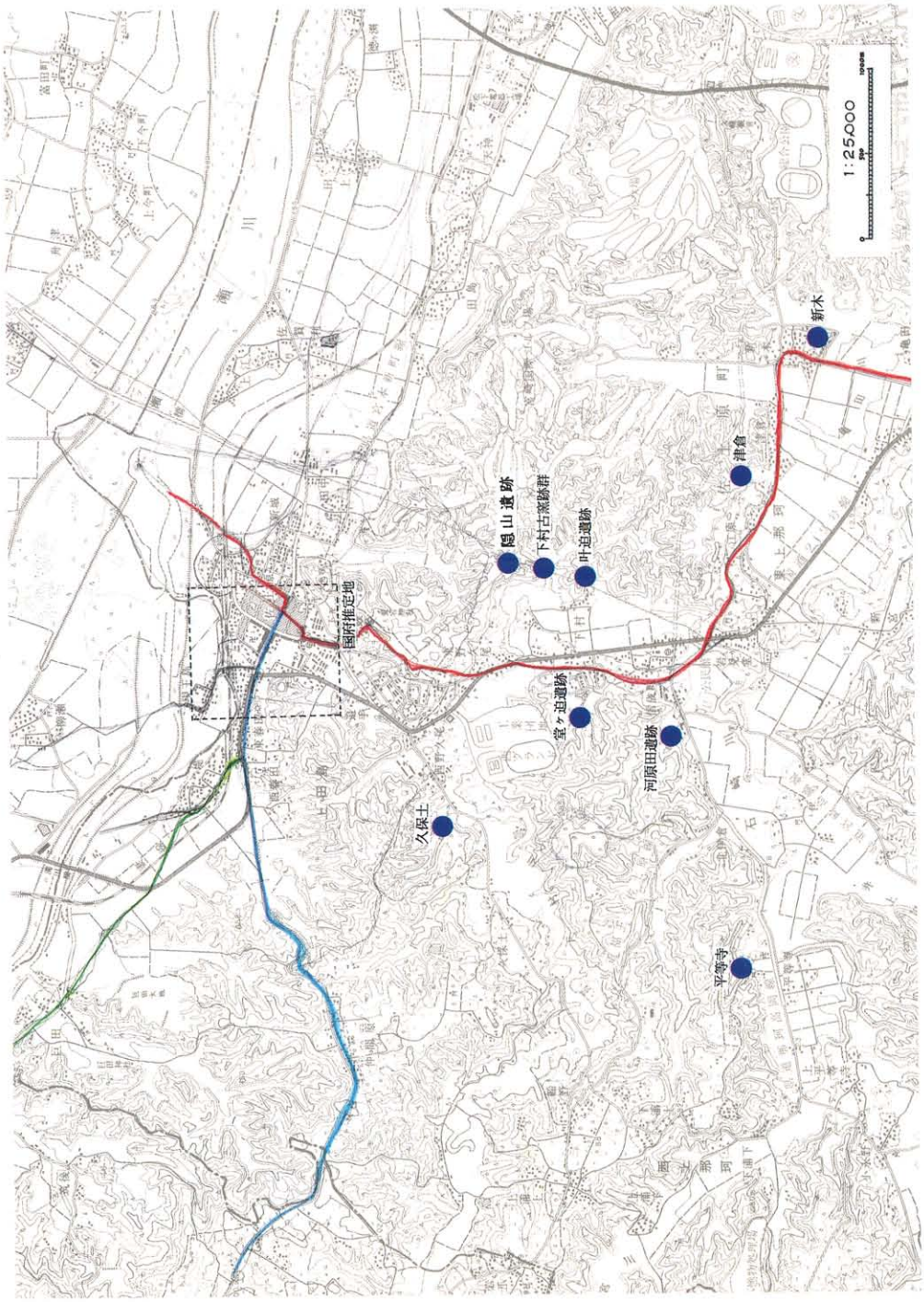
12月17日は、佐土原町議会が遺跡を視察し、その際、後藤典夫町長及び　の方も同行された。

12月に入って近世集石墓及び弥生期集石の１／20平面実測を進めた。後半は、縄文草創期の集石遺構を行いその中の一遺構を展示用として切り取り作業を実施した。作業は、12月25日県文化課吉本正典主事のもと切り取られ現在、整理室（旧法務局跡地）に保管されている。

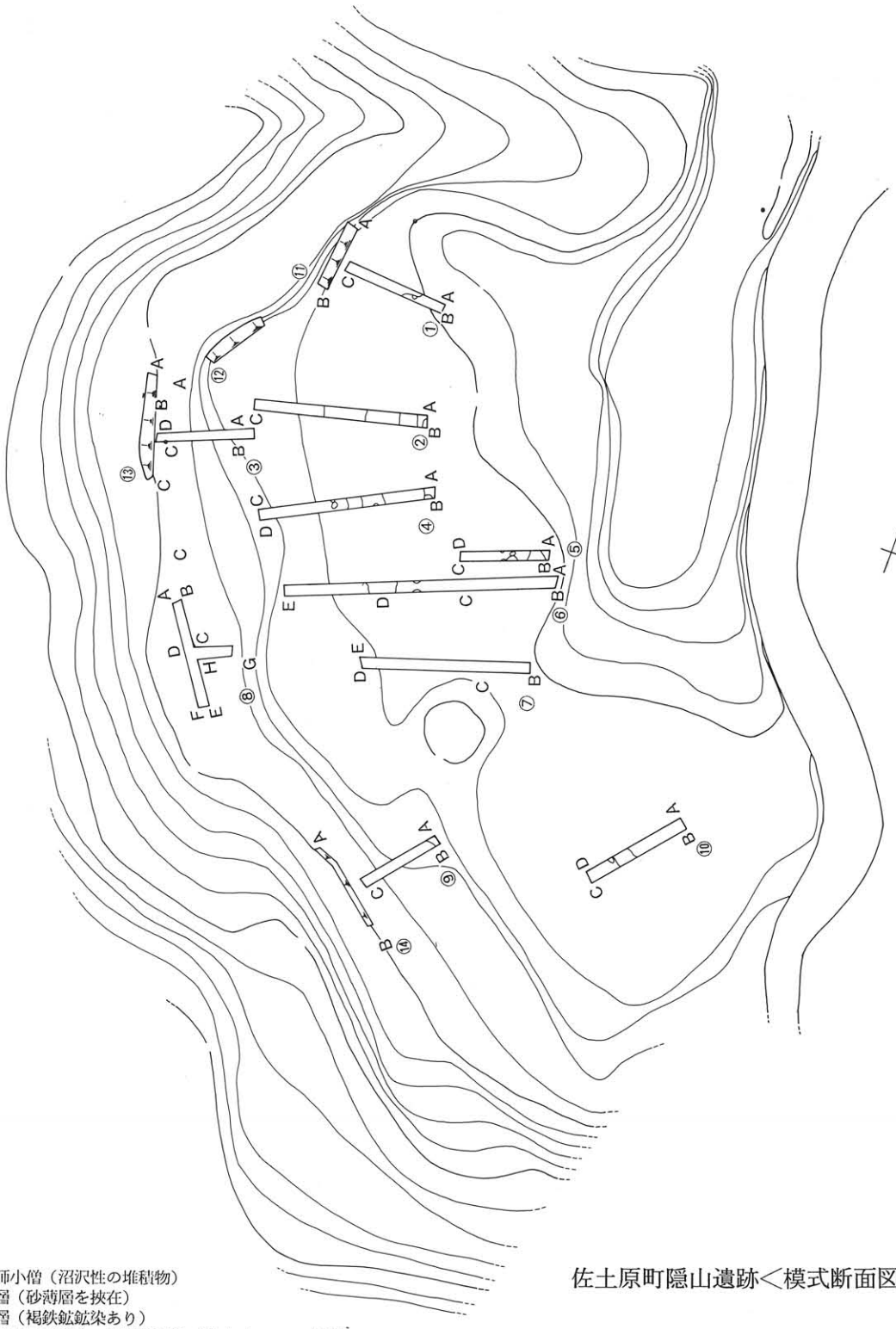
隠山遺跡発掘調査成果の総括を行うため福岡大学人文学部小田富士雄教授を12月25・26日に招聘した。指導によれば、建物跡は柱穴の不整列及び礎石の出土状況から近世の建物であろう。内容は、集石墓が丘陵周辺に位置すること、また出土遺物の瓦堂の文様から寺院跡と推理される。

今後の課題として、各柱穴内出土の遺物を分析し、隠山遺跡において寺院が何度建て替えられ、時代幅がどのくらいあったのかを探って当時の寺院関係を浮き彫りにしたい。そこでようやく下村周辺の古代から中近世にかけての歴史の一端を垣間見ることができよう。

12月26日調査は、完了した。平成３年７月初旬から調査が開始されて以来、１年半の長期間の調査であった。



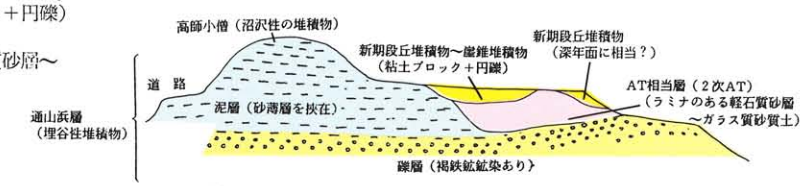
第１図　下村窯跡調査地周辺の地形――布目瓦等出土分布図



第２図　隠山遺跡の土層配置図

高師小僧（沼沢性の堆積物）
泥層（砂薄層を挟在）
礫層（褐鉄鉱鉱染あり）
新期段丘堆積物～崖錐堆積物（粘土ブロック＋円礫）
新期段丘堆積物（深年面に相当？）
ＡＴ相当層（２次ＡＴ・ラミナのある軽石質砂層～
ガラス質砂質土）

佐土原町隠山遺跡＜模式断面図＞



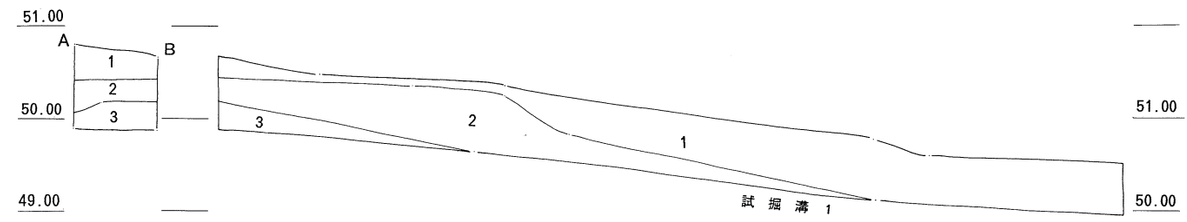
第Ⅱ章　発掘調査の概要

1.　遺跡の立地と環境

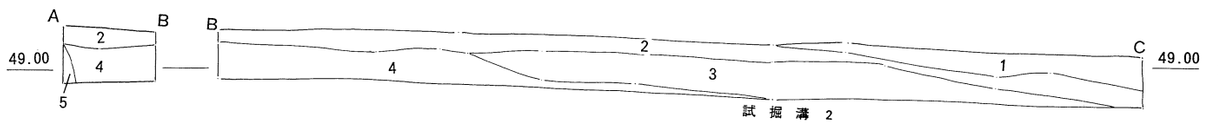
隠山遺跡は、大字上田島字隠山に所在し、その丘陵周辺には多くの遺跡が点在している。中でも寺院及び窯跡関係の遺跡は、宮崎県内においても質量ともに中心的な存在であった。近隣の南方丘陵端部沿いには下村古窯跡群、吐迫遺跡がある。3km圏内には、久保土・堂ケ迫・河原田・津倉・新木・平等寺の各瓦出土遺跡が取り巻く。さらに国府推定地が北方1km先にあり、一ツ瀬川を隔てた南九州側の北への出入口ともいうべき役割を果たしてきた。すなわち、薩摩街道・肥後街道・飫肥街道の結節点で、江戸期は港や宿泊地として栄えた。時代が遡ってすでに奈良・平安期において字古城北側に接する東禅寺または、大字下那珂の久峰観音が祭られている久峰寺が建立されていたといわれる。創建者は、共に敏達天皇（西暦583年）期に新羅から来日した日羅上人と伝えられる。この中で東禅寺は、隠山遺跡から北東1km強範囲に位置する。当時人びとの往来は、尾根筋を利用したものであった。理由には、先がみとおせるのと安全面が確保できることがあげられ、両者は佐土原丘陵の尾根筋によって繋がっていたと思われる。隠山遺跡は、時代を問わず主道の近くにあった。今回の調査では、縄文草創期（B．C11000）から近世期初頭（AD1600年代）にかけて遺物が出土した。

このことから隠山遺跡の実像を解く鍵は、遺跡と道とのかかわりにあると思われる。以下時代を通して推測する。先史時代は、交通よりも生活の維持に重点を置き、その一つとして遺跡西側には下村川が流れ日常生活にとって水は欠かせなかったであろう。古代、いわば奈良期以降では、中央の国家統一が進められ生活品の流通が頻繁に行われるようになる。須恵器・土師器は、食だけでなく副葬品にも使用され当時の流通の主流を成していた。また6世紀前半に百済・新羅から仏教が入った影響で、741年国分寺建立の詔を契機として各国で国分寺・国分尼寺が設置された。これにより多くの瓦が必要になり、窯が各地で造営の運びとなった。

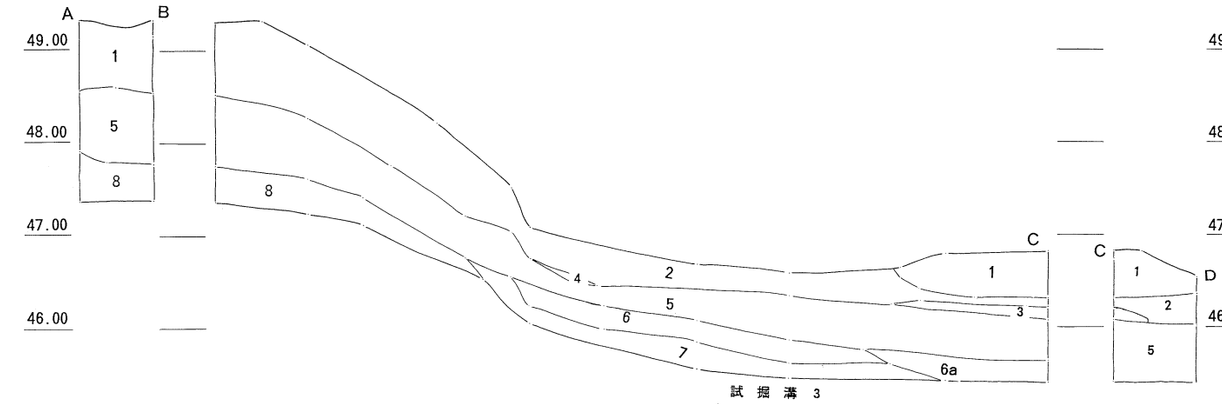
下村古窯跡群はこうした時代背景の中で出現し、国分寺などの官営建設へ瓦を供給していたと思われる。隠山遺跡は中・近世にいたっては、眼下の下村川を渡った西側に飫肥街道が通うなど時代を通して物資流通の周辺にあった。この地は、遙か1万年以上前から現代にいたるまで歴史模様を見つめていたのであろう。



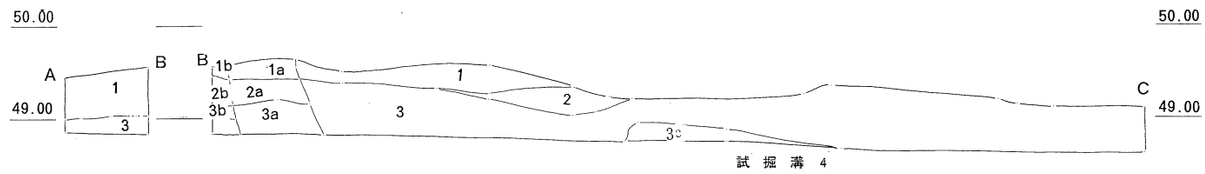
1
第1層 黄橙 8／8 砂質粘土
第2層 にぶい赤褐 5／3 砂質粘土遺構面
第3層 赤褐 3／2 砂質粘土遺構面

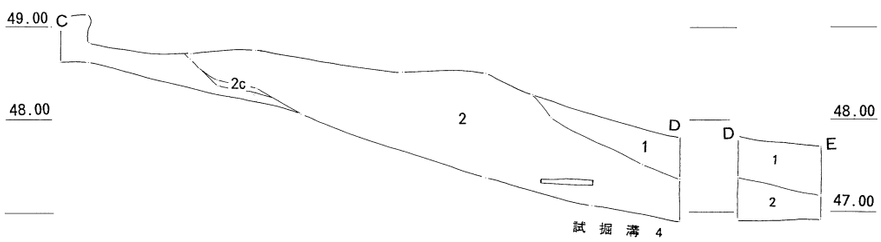


2
第1層 暗赤褐 3／6 砂質粘土
第2層 にぶい赤褐 5／3 砂質粘土
第3層 黄褐 5／6 砂質
第4層 にぶい黄褐 5／6 砂質粘土
第5層 褐灰 4／1 粘質土

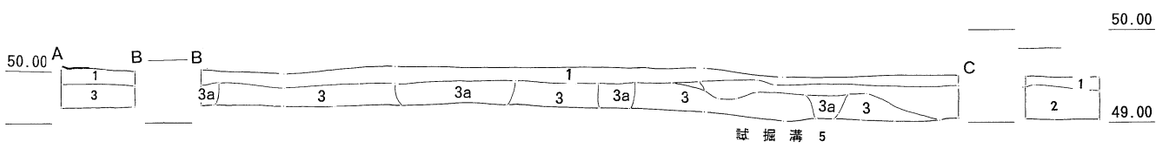


3
第1層 浅黄 7／3 礫が多く混入
第2層 にぶい黄橙 5／3 砂質粘土
第3層 にぶい黄橙 5／4 砂質粘土
第4層 にぶい黄橙 6／4 砂質粘土
第5層 明黄褐 6／6 砂質
第6a層 明黄褐 7／6 砂質
第6層 橙 7／6 砂質粘土
第7層 橙 6／6 砂質粘土
第8層 明褐 5／6 砂質

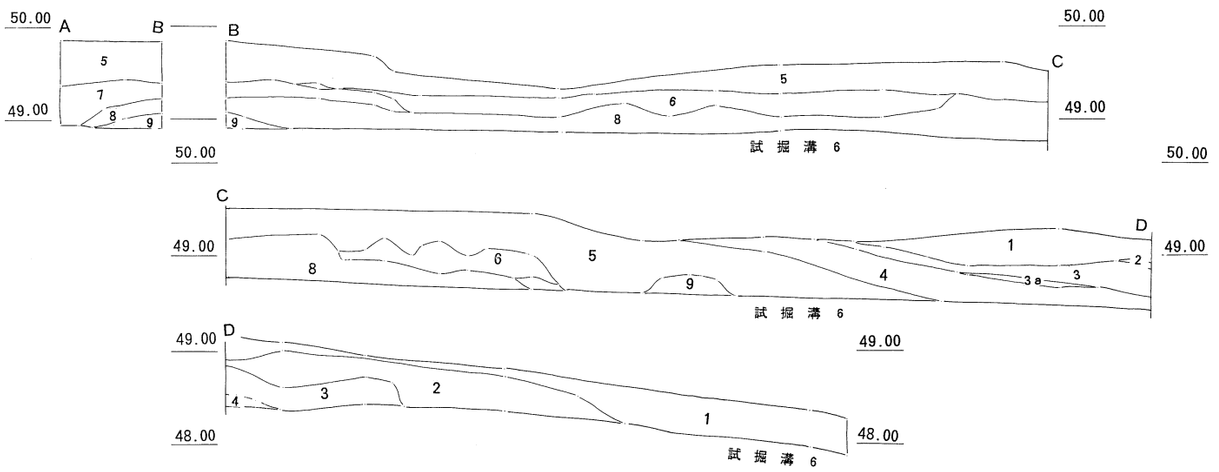




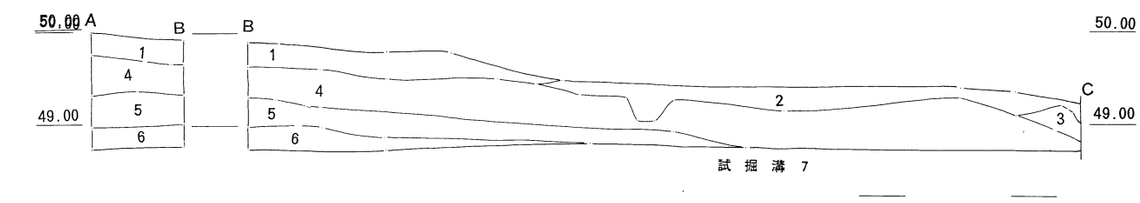
4
第1層 にぶい黄褐 5／3 砂質粘土
第1a層 にぶい黄褐 5／4 砂質粘土
第2層 明黄褐 6／6 砂質
第2a層 明黄褐 7／6 砂質
第2b層 明黄褐 6／8 砂壌土
第2c層 黄褐 5／6 砂壌土
第3層 橙 7／6 砂質粘土
第3a層 橙 6／6 砂質粘土
第3b層 橙 6／8 砂質粘土
第3c層 明褐 5／6 砂質

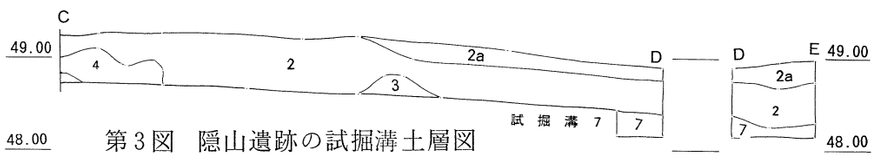


5
第1層 にぶい黄褐 5／3 砂質粘土
第2層 にぶい黄褐 5／4 砂質粘土
第2a層 にぶい黄橙 6／4 砂質粘土
第3層 橙 6／6 砂壌土
第3a層 灰褐 4／1 砂壌土



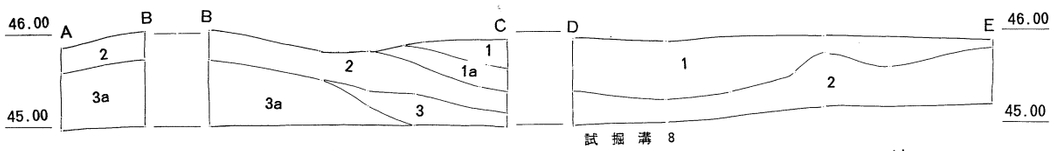
6
第1層 にぶい黄褐 5／3 砂質粘土
第2層 にぶい黄褐 5／4 砂質粘土
第3層 明黄褐 7／6 砂質
第3a層 明黄褐 6／8 砂質
第4層 橙 7／6 砂質粘土
第5層 橙 6／6 砂質粘土
第5a層 橙 6／8 砂質粘土
第6層 暗褐 3／3 砂壌土
第6a層 暗褐 3／4 砂壌土
第7層 橙 6／6 砂質粘土
第8層 黄橙 8／6 粘質土
第9層 黄橙 8／8 粘質土

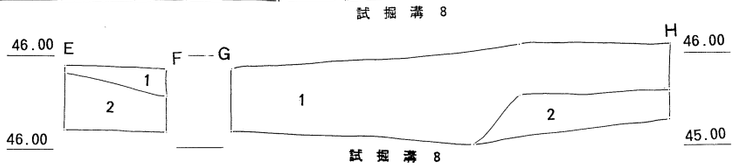




7
第1層 にぶい黄褐 5／3 砂質粘土
第2層 にぶい黄褐 5／4 砂質粘土
第2a層 にぶい黄褐 4／3 砂質粘土
第3層 明黄褐 7／6 砂質
第4層 明黄褐 6／8 砂質
第5層 にぶい黄橙 6／4 砂質粘土
第6層 黄橙 8／6 粘質土
第7層 黄橙 8／8 粘質土

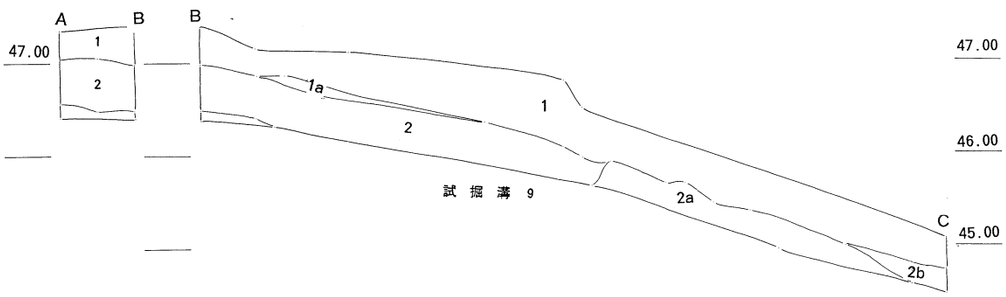
第3図 隠山遺跡の試掘溝土層図





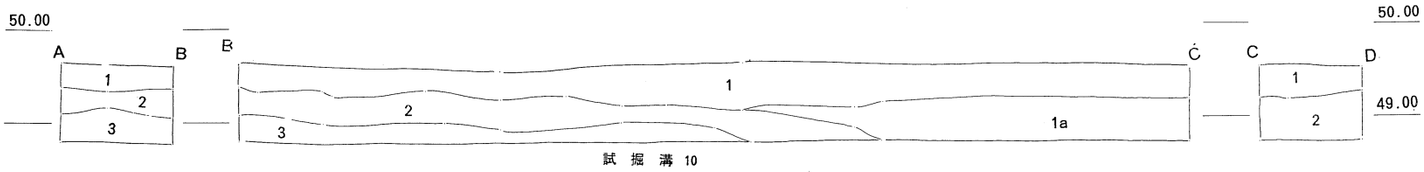
8

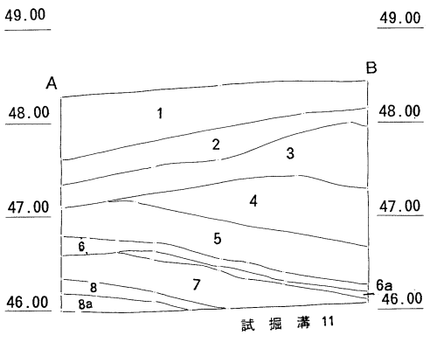
第1層	黄橙 7／8	砂質土
第1a層	明黄褐 6／6	ガラス質土
第2層	明黄褐 6／6	ガラス質土
第3層	にぶい黄褐 6／3	軽石質砂層
第3a層	にぶい黄褐 6／3	軽石質砂層



9

第1層	灰白 8／1	粘性土
第1a層	灰白褐 7／1	粘性土
第2層	にぶい黄橙 7／3	砂質土
第2a層	明黄褐 6／6	砂質土
第2b層	黄褐 5／6	砂壌土



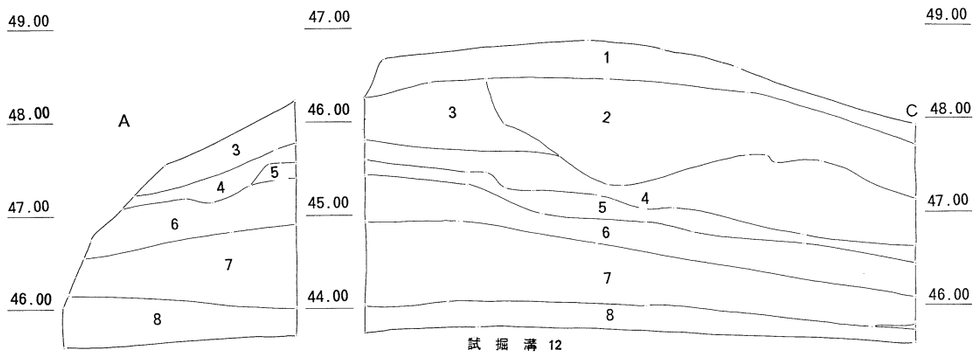


10

第1層	灰白 8／2	粘性土
第1a層	にぶい黄橙 7／3	粘性土
第2層	明黄橙 6／6	砂質土
第3層	黄褐 5／6	砂質土

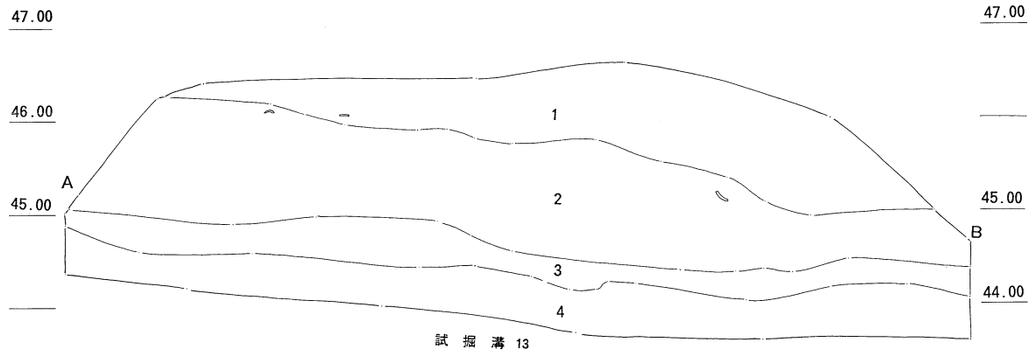
11

第1層	灰白 8／1	粘性土（円礫混り）
第2層	灰白 7／1	粘性土
第3層	灰黄 7／2	砂質粘土
第4層	灰白 8／2	砂質土
第5層	黄橙 7／8	砂質土
第6層	明黄褐 6／6	ガラス質土
第6a層	明黄褐 7／6	ガラス質土
第7層	にぶい黄褐 6／3	軽石質砂層
第8層	にぶい黄褐 5／3	軽石質砂層
第8a層	にぶい黄褐 5／4	軽石質砂層



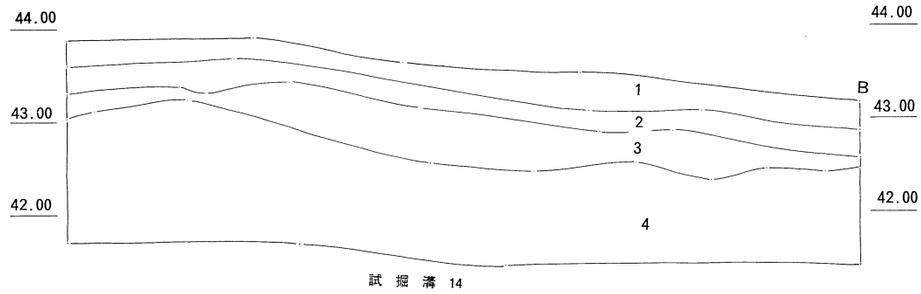
12

第1層	灰白 8／1	粘性土（円礫混り）
第2層	灰白 7／1	粘性土
第3層	灰白 7／2	砂質粘土
第4層	灰白 8／2	粘性土
第5層	黒褐 3／1	砂質土
第6層	明黄褐 6／6	ガラス質土
第7層	にぶい黄褐	軽石質砂層
第8層	にぶい黄褐	軽石質砂層



13

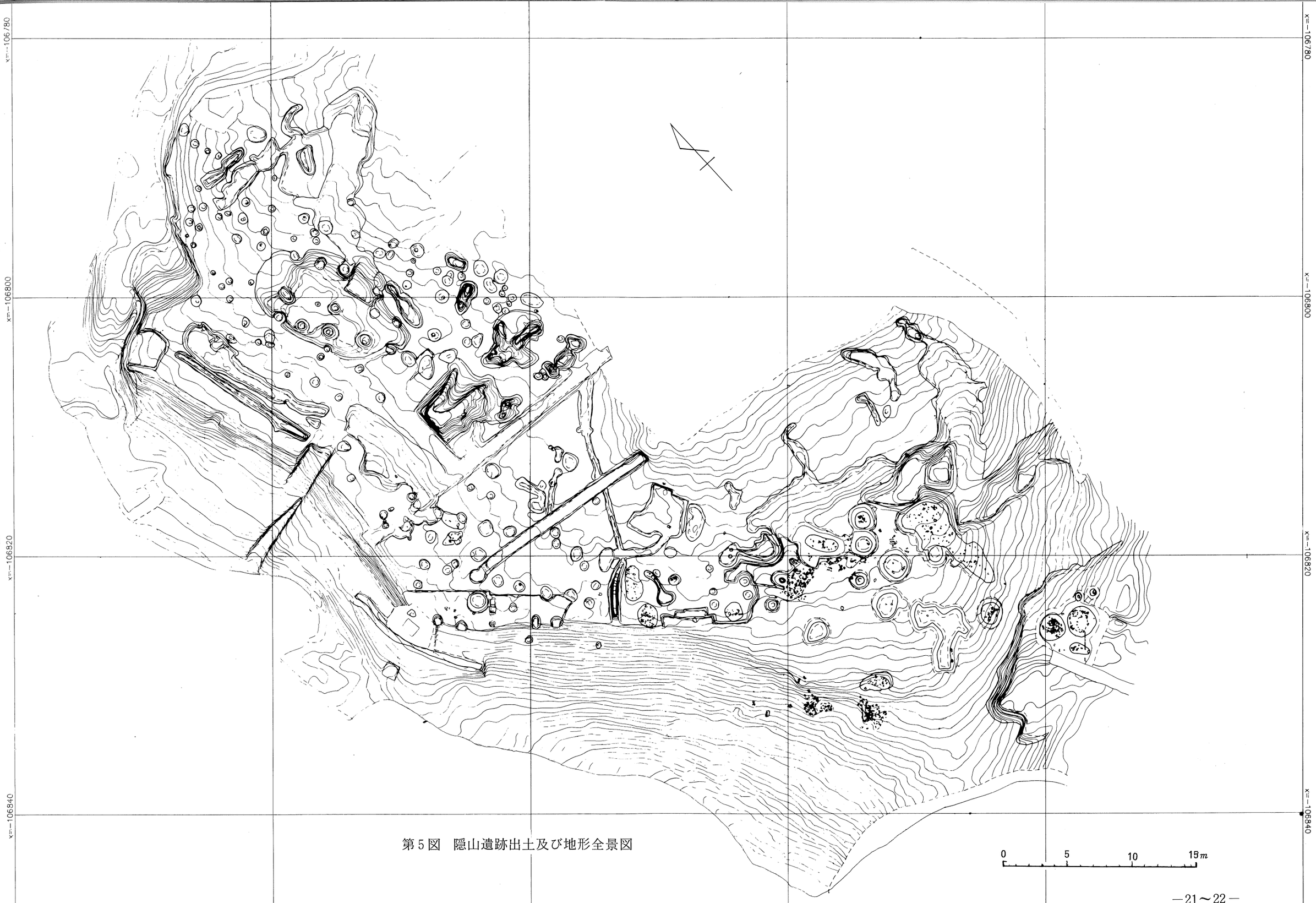
第1層	灰白 8／1	粘性土（円礫混り）
第2層	灰白 7／1	粘性土（円礫混り）
第3層	黒褐 3／1	砂質粘土
第4層	明黄褐 6／6	ガラス質土



14

第1層	暗褐 3／4	砂質粘土
第2層	暗褐 3／3	砂質粘土
第3層	黒褐 3／2	砂質粘土
第4層	にぶい黄褐 7／3	粘性土（円礫混り）

第4図　隠山遺跡の試掘溝土層図



第5図　隠山遺跡出土及び地形全景図

2. 調査概要

(1) 遺　構

隠山遺跡が立地する箇所は、地質学上宮崎層群（新第三紀～第四紀更新世前期）によって構成されている。遺跡のある痩尾根部には、宮崎層群を不整合に覆う通山浜層（更新世中期：73～13万年前）が分布している。通山浜層は埋谷性堆積物で、本地域では下部は礫層で形成され、上部は砂の薄層を頻繁に挟む青灰色層を主体とする。さらに通山浜層を覆う堆積層としては、オコシローム、入戸火砕流堆積物（ＡＴ）の２次堆積物、アカホヤの２次堆積物などがある。各ローム層で堆積年代が推定できる。

オコシロームは２～３mm大の褐色軽石、赤褐色スコリアまたは灰黒色の岩片を多量に含む褐色土である。岩相は、国富町方面のＡＷ（アワオコシ）とＩＷ（イワオコシ）の中間部にある褐色ローム層（約35000年前）に比定できる。本層は、トレンチ３下層で確認される。ＡＴ相当層（２次ＡＴ）は、トレンチ12・13・14の露頭部下位で40cm＋の層厚を有する軽石層砂層（Ｃ層）30～35cmの明褐色ガラス（ｂ層）、25cmの褐色ガラス質砂質土層（ａ層）からなり約22000年前の噴出テフラと推定される。アカホヤ相当層（２次アカホヤ）は、トレンチ６付近の掘削表面に堆積しており、黄橙色砂質土で約6300年前の噴出テフラである。

次に現在の地形を形成した過程に融れると、模式断面図に示されるようにこの地域は、以前宮崎層群の谷間であった。そこに泥と礫を中心とする通山浜層が堆積（約40～50万年前）した。やがて長い歳月と共に陸化と侵食が始まる。さらにそれによって形成された谷間に火山灰（オコシローム等）が堆積する。以後、侵食と堆積が繰り返されほぼ現在の地形の原形ができあがったのは、約15000年前（縄文早期）の頃であった。カシワバンやアカホヤは、その上から降下した。

今回出土した遺構を時代別に採り上げると、縄文草創期の集石及び礫群や土壙、中世末期から近世にかけての集石、建物関係の遺構、道などである。集石及び礫群または土壙については、ＡＴ（２次）の直上に分布している。集石は６遺構ほど検出され、出土地点は主に遺跡南東部である。特徴として河原石を用い、直径は70～150cm幅である。石の表面は赤く焼け、または炭化物が付着している。石を取り除くと皿状くぼみとＵ状の堀込みをもつ２タイプに分けられ、共に底付近には配石が見られなかった。礫群においても集石と同じく南東部に分布する。河原石タイプで10cm前後の大きな石が多い。層位上では、集石より低いレベルで出土し時期的にもやや古いと思われる。土壙内からは、出土遺物は確認できず用途の性格は不明である。

変わって中世末期から近世にかけての集石遺構は、礫が細かく周辺陸地上の自然石を用いたのであろう。直径は、50～100cm幅で石の表面には焼痕がない。石のあり方は、Ｕ状の堀方をもち出土遺物は上層にのみ見られ丘陵台地の縁辺部に分布する。建物遺構は、推定復元

によっておよそ2棟建っていたと思われる。柱穴の中で礎石を伴うものは、3ケ所であった。しかし、石の配置状況から根石としての利用の可能性が高い。その他の柱は、レベル及び時期的にはほぼ同じであり不整列ながらも8間4間と5間4間の建物が2棟想定できる。

(2) 遺　物

石器の出状地点は、試掘トレンチ内及び遺構検出面より上層である。遺物包含層は、アカホヤ相当層とＡＴ相当層である。時期は、縄文草創期から弥生期にかけての遺物であろう。土器の出状地点は、縄文草創期ないしは縄文晩期と、中世末期及び近世期、ともに主に集石遺構または建物遺構内から出土した。

① 石斧（第6図　1～5）

1の形態は、楕円状で表面は摩滅している。主要剝離面は調整が施されていない。2は、両面剝離の打製石斧である。3は、片側縁のみに調整を施した縦長石斧である。4は、楕円状の石斧で刃部は両面から求心状に形成される。5は、かなり磨滅しており刃部は楕円状に広がった先端部に剝離面がわずかに見られる。

② スクレイパー（第6図　6）

楕円状の形態を呈し、成形は石核の自然面を除去した後、主要剝離面を中心に求心状に剝離することによって刃部を作出している。

③ 石核（第7図　7）

円盤形を呈し、求心状に剝離されている。

④ 剝片（第7図　8～14）

8は、求心状に剝片剝離する段階で剝がされ、その後縁片部に二次加工を施した。9は、中央に稜をもつ縦長剝片である。外剝離面下部には自然面を残し、打面を直線的に後退させながら剝片を剝離させている。両縁の剝離痕は、使用痕である。10は、不定形の剝片で打面は節理面である。11は、不定形の剝片で主要剝離面上部に残る小剝離痕は打面調整による。12は、外剝離面の中央に稜が走っており二次加工が加えられている。下端部には、刃こぼれ状の使用痕がある。13は、外剝離面の下端部に自然面をもつ薄手の剝片である。外剝離面の両側縁には小剝離痕状の使用痕が認められる。14は、剝片剝離の際に取られた不定形剝片である。

⑤ 縄文土器（第8図　1～9）

1・2・3・4は、爪形文を口縁部近くの隆帯文に施す。5は、器面を貝殻で調整した後、さらに押引きで帯状に施文する。6は、口縁部に刻目を施し、その他は爪形文及び隆帯文を用いる。7は、胴部に円形の穿孔を有する。8・9は、口縁の下部に三角形凹帯文を有し下面に貫通しない穿孔を施す。

⑥ 須恵器（第8図　10）

頸部付近にあたり、表面は格子目叩きで裏面はヘラ削りである。

⑦　陶磁器（第９図　11～18）

11・14・15は、瀬戸・美濃系の碗類である。12は、肥前系の青磁、17・18は、関西系陶器と思われる。

⑧　瓦堂（第９図　19）

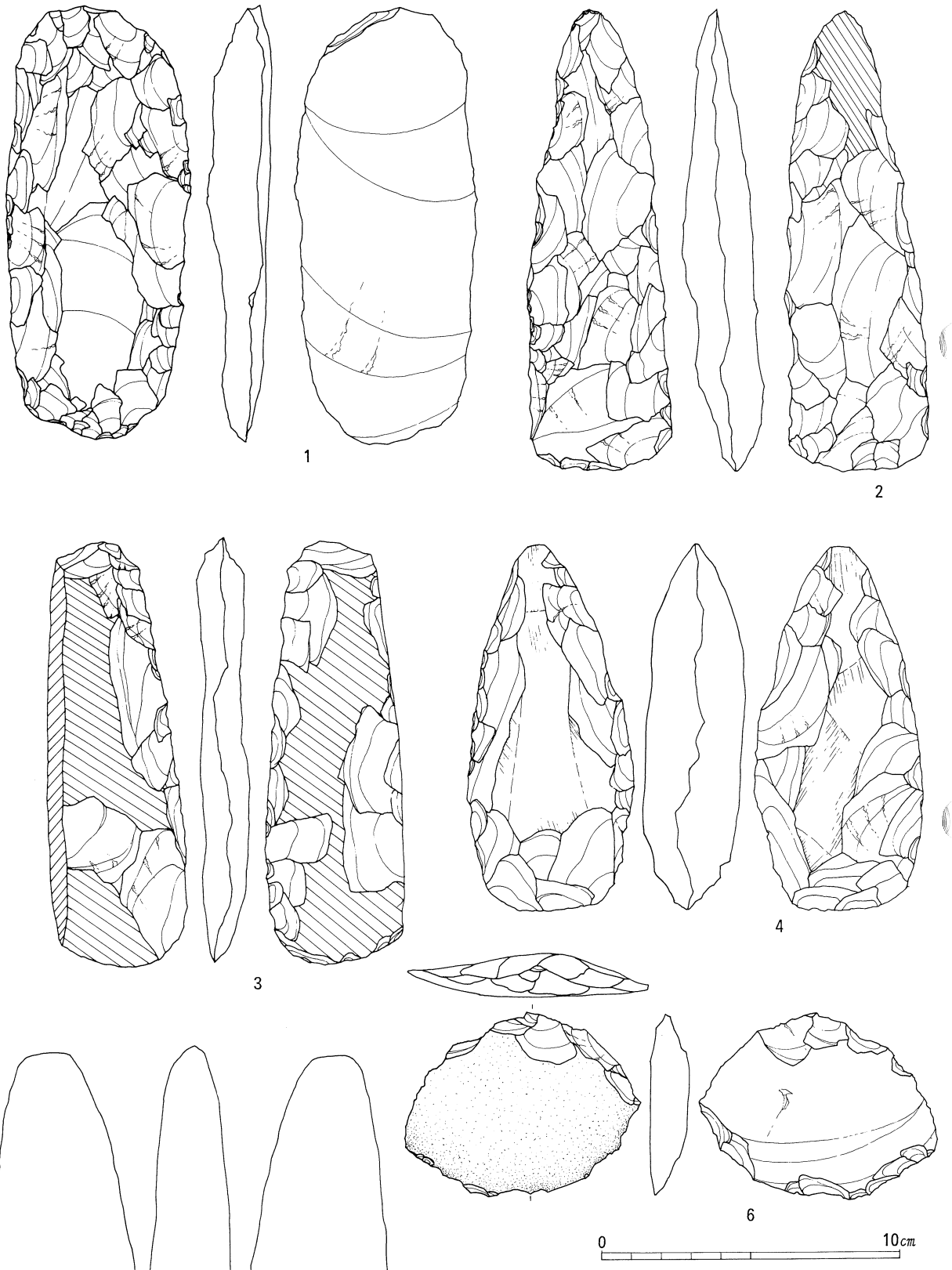
屋蓋の形が入母屋造りで、焼成は土師質である。基壇は、粘土板で作られている。丸瓦は半裁竹管状工具で表現されている。時期は、瓦堂の文様を類推すると中世末期から近世期と思われる。

⑨　土製品（第９図　20）

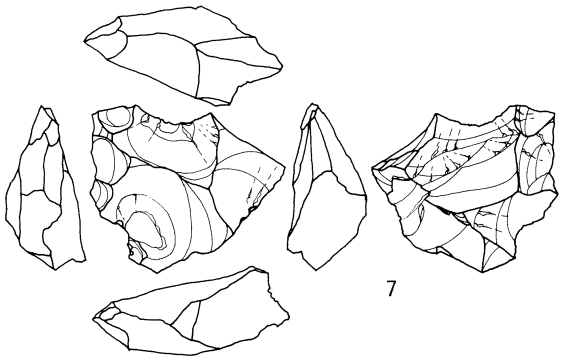
ヘラ状工具による削り出しで薬師如来を浮き彫らせて製作している。時期は、瓦堂とほぼ同じであろう。

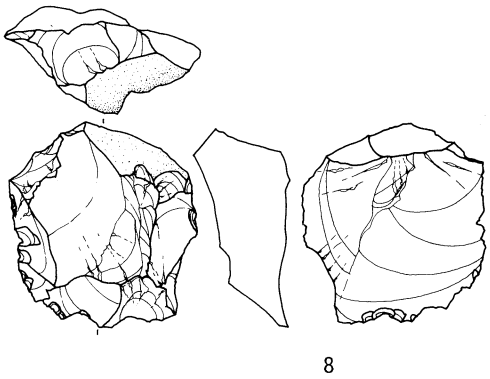
⑩　瓦器（第10図　21～23）

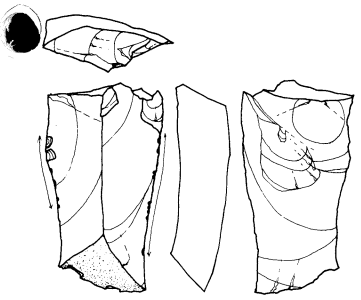
21は、内面に布目痕が施されている。22・23は、主にヘラ切り、篦削りの調整痕が見られる。時期は、形態から中世末期及び近世にかけての瓦と推測できよう。

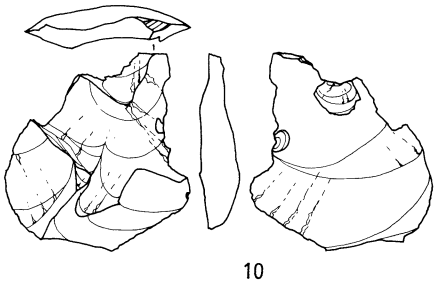


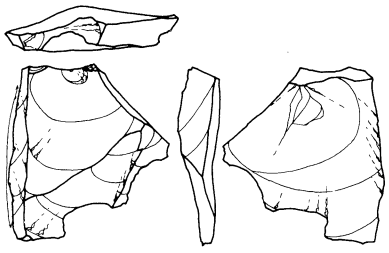
第6図　隠山遺跡出土遺物実測図(1)

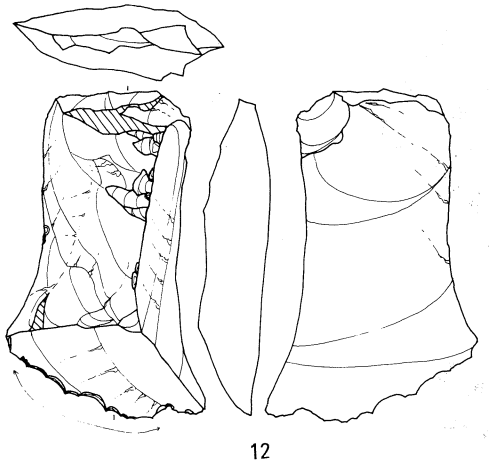


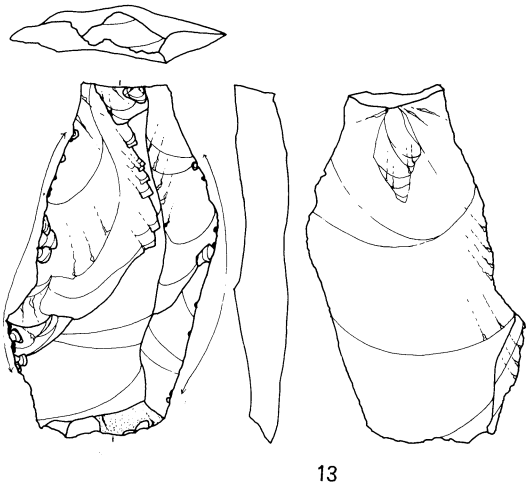


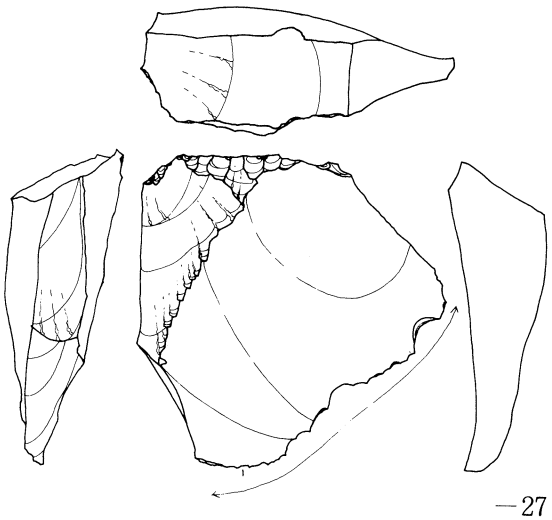


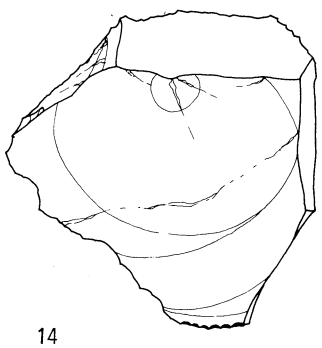


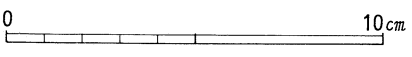




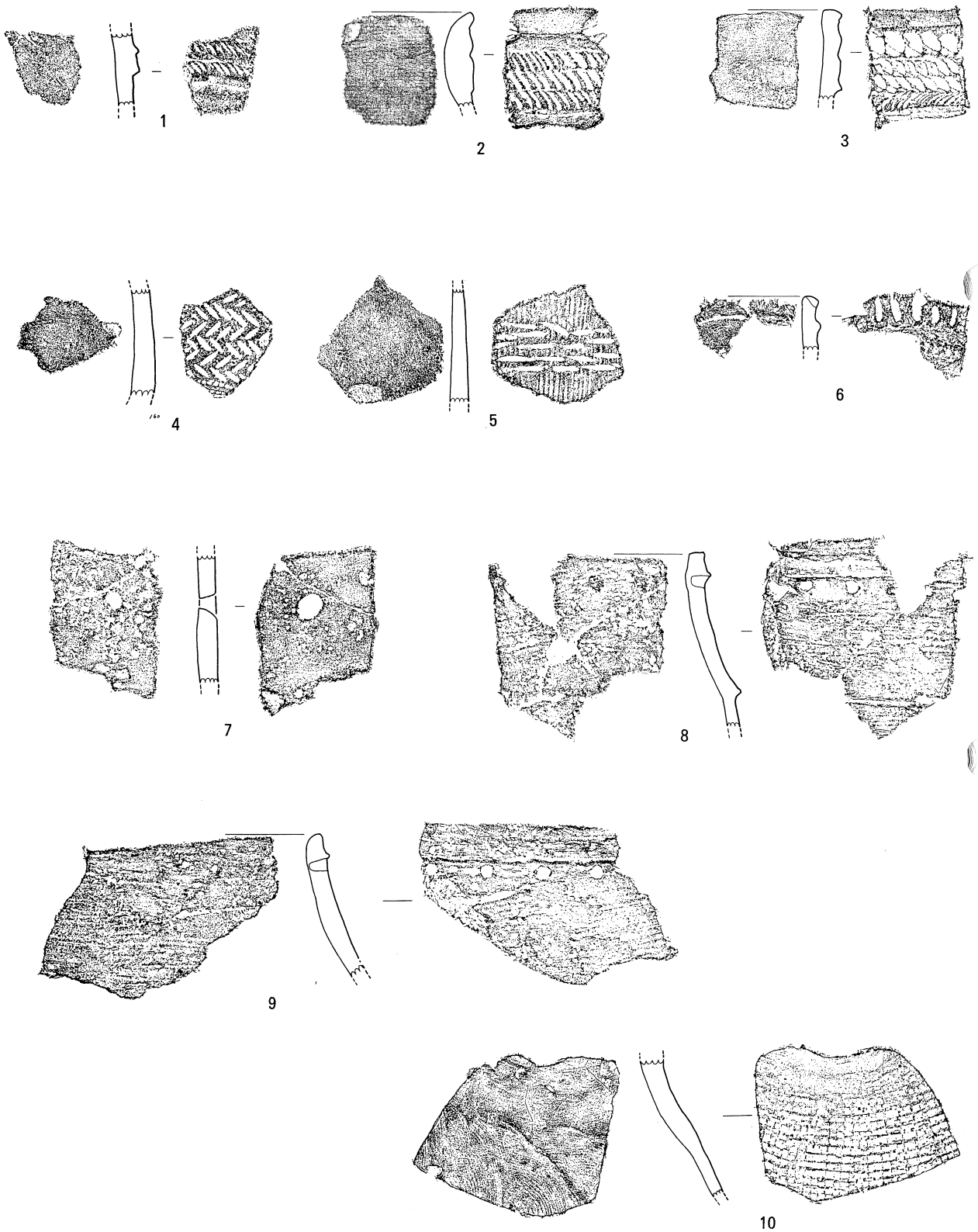




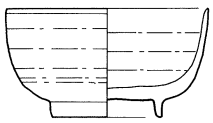




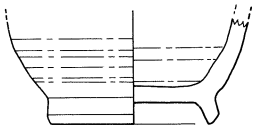
第7図　隠山遺跡出土遺物実測図(2)



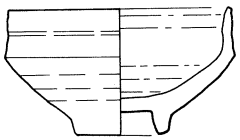
第8図　隠山遺跡出土遺物実測図(3)



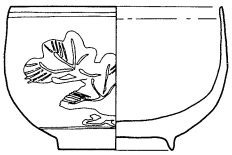
11



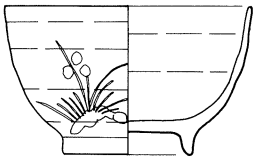
12



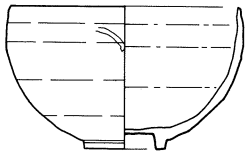
13



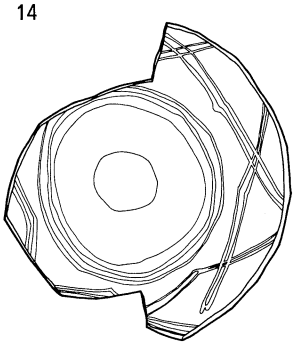
14



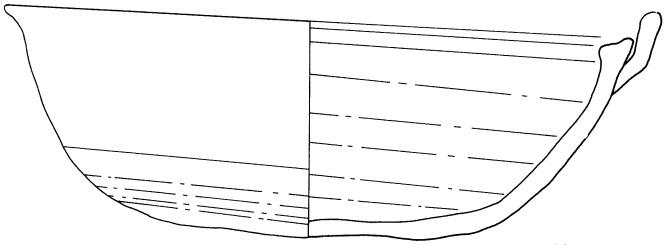
15



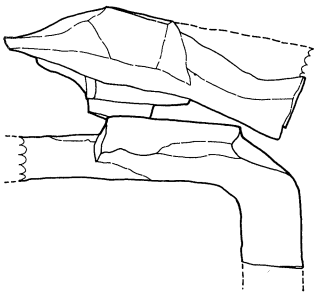
16

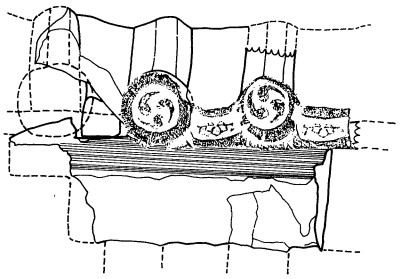


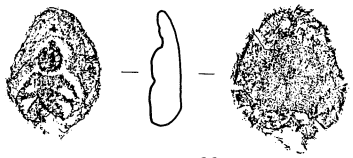
17



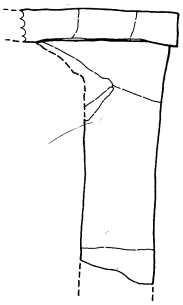
18

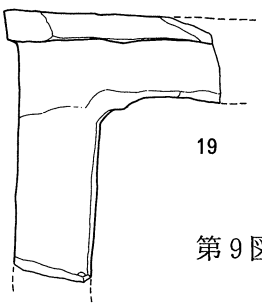






20

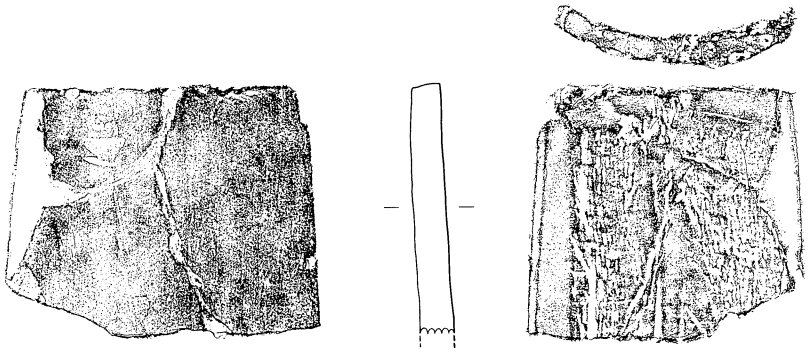




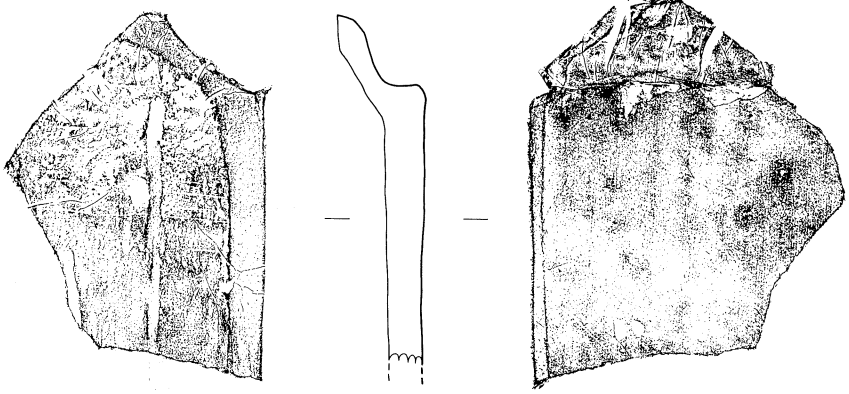
19

0 10cm

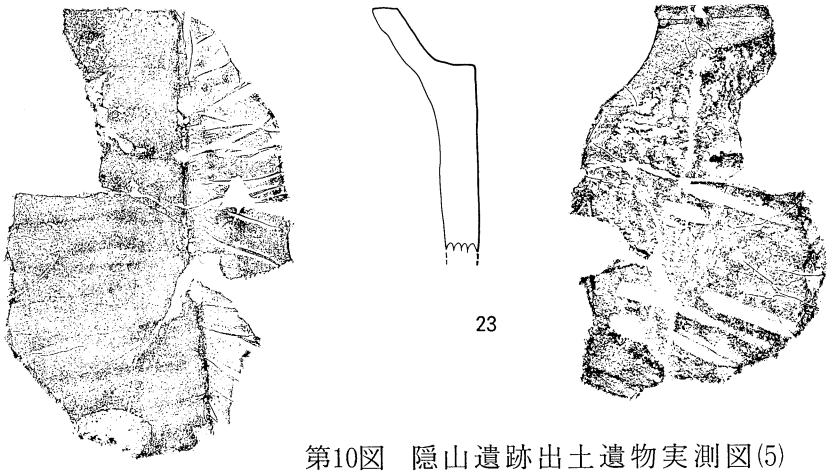
第9図　隠山遺跡出土遺物実測図(4)



21



22



23

第10図　隠山遺跡出土遺物実測図(5)

0　10cm

表Ⅰ－(1)　　隠　山　遺　跡　　出土石器観察表

No.	器　種	出土地点	石　材	最大長（cm）	最大巾（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	備　　考
1	石　斧	K　山 52	頁　岩	14.5	6.2	2.2	199.0	楕円形、片面調整。
2	石　斧	K　山 51	頁　岩	15.5	4.9	2.7	165.0	撥形、両面調整。
3	石　斧	K　山 50	頁　岩	14.2	5.1	1.8	144.0	短冊形、片側縁調整。
4	石　斧	K　山 16	砂　岩	12.3	5.7	3.2	122.8	撥形、打撃の後に磨き加える。
5	石　斧	K　山 11	砂　岩	11.6	5.2	2.9	122.9	撥形、磨製である。
6	S　C	表　　採	流紋岩	6.3	8.0	1.5	69.0	周縁加工を施す。
7	C	K　山 68	頁　岩	2.5	5.1	2.1	32.3	求心状に剥離される。
8	F	K　山 93	流紋岩	5.5	5.5	2.6	51.0	打面調整により剥離か。
9	F	K　山 167	流紋岩	5.6	3.0	1.5	19.7	両縁に小剥離痕状の使用痕を有す。
10	F	K　山 15	流紋岩	5.2	4.9	1.0	10.2	上端部に二次加工あり。
11	F	K　山 102	流紋岩	4.7	4.2	1.0	13.8	主要剥離面左側縁に小剥離痕状の使用痕を有す。
12	F	K山53－1	流紋岩	8.6	6.0	1.8	75.0	下端部に刃こぼれ状の使用痕を有す。
13	F	K山53－2	流紋岩	9.3	5.7	1.3	66.0	スクレイパーの未製品か。
14	F	K　　山	流紋岩	8.3	8.2	2.9	114.0	下端部に刃こぼれ状の使用痕を有す。

表１－（１）隠山遺跡遺物観察表

表Ⅰ－(2)　隠　山　遺　跡　　出土土器観察表

遺物番号	種別	器種	出土地点	法量 (cm) 口径	底径	器高	調整・文様の特徴	色調 外	色調 内	備考
1	縄文土器	深鉢	6トレンチ	—	—	—	三角形の隆帯の上部に爪形文を連続施文、内面は縦ナデ。	明褐 5／6 Hve7.5YR	明褐 5／6	堂地西に類似
2	縄文土器	深鉢	139	—	—	—	平たい隆帯に爪形文を連続施文。	にぶい橙 7／4 Hve7.5YR	褐灰 4／1 Hve7.5YR	堂地面に類似
3	縄文土器	深鉢	150	—	—	—	上に大きな爪形、中二列は平たい隆帯上に爪形、一番下は三角隆帯、上部に爪形を連続施文。	浅黄橙 8／4 Hve10YR	浅黄橙 8／3 Hve7.5YR	爪形文系
4	縄文土器	深鉢	160	—	—	—	爪形を斜目に施文、下部には刺突文、内面は横方向のナデ。	明褐 5／6 Hve7.5YR	明褐 5／6	爪形文系
5	縄文土器	深鉢	66	—	—	—	貝殻（ヘラ？）による調整の上に、押引きを帯状に施文する。	にぶい橙 6／4 Hve7.5YR	にぶい橙 6／4	
6	縄文土器	深鉢	167	—	—	—	口縁部に刻目文、その下部に三角の隆帯、上部、下部に爪形文を施文。	にぶい橙 7／4 Hve7.5YR	にぶい橙 7／4	
7	縄文土器	深鉢	6－1トレンチ	—	—	—	上部に円形の穿孔を有する。頸部にかけて内反する。	橙 7／6 Hve7.5YR	橙 7／6	
8	縄文土器	深鉢	99	—	—	—	平縁口縁の下部に三角形の凸帯、その下に貫通しない孔を有す。胴部は口縁より広がる。	にぶい黄橙 7／4 Hve10YR	にぶい黄橙 7／4 Hve10YR	
9	縄文土器	深鉢	4トレンチ	—	—	—	平縁口縁の下部に三角形の隆帯、その下に貫通しない孔を有す。胴部は口縁より広がる。	にぶい黄橙 7／2 10YR	にぶい黄橙 7／2 10YR	
10	須恵器	甕	9	—	—	—	0.5～2.0㎜の黒粒が少量含まれる。表面は格子叩き目、裏面はヘラ削り。	褐灰 6／1 10YR	灰白 7／1 10YR	
11	白磁器	椀	55	7.9	4.3	4.3	胴部から口縁にかけて外反する。口縁端部は丸味を帯びる。	灰白 8／1 2.5Y	灰白 8／1 2.5Y	
12	青磁器	椀	153	—	6.2	—	外面に釉がある。回転ナデ調整。高台は削り出し。	浅黄橙 8／3 7.5YR	灰白 7／2 5Y	
13	陶器	椀	5－1トレンチ	8.6	3.2	5.0	胴部に稜をもつ。高台は削り出しである。	明褐灰 7／1 7.5YR	灰白 7／1 2.5YR	
14	白磁器	椀	5－2トレンチ	8.4	4.4	5.7	胴部から口縁にかけて内反、高台は外反し、接地部やや突る。	灰白 8／1 Hve10GY	明緑灰 8／1 Hve10Y	
15	白磁器	椀	46	9.7	4.7	5.8	胴部から口縁にかけて外反、口縁端部はやや尖る。	灰白 8／1 5GY	灰白 8／1 5GY	紋様－暗青灰 4／1 5B
16	陶器	椀	110－112	8.8	2.8	5.7	胴部から口縁にかけて内反、端部はやや尖り、高台は削り出しである。	灰白 7／1 Hve 7.5Y	灰白 7／2 Hve 7.5YR	紋様－オリーブ黒 3／2　Hve10Y
17	施釉陶器	皿	68	11.9	3.8	3.1	胴部から口縁にかけてゆるやかに外反。口縁端部は楕円状で、高台は削り出しである。	灰白 8／2 2.5Y	灰白 8／2 7.5Y	
18	陶器	鍋	151	23.5	—	8.6	胴部から口縁にかけて外反。二重口縁を呈す。	暗褐 3／4 10YR	暗褐 3／4 10YR	
19	土師質	瓦堂		—	—	—	半裁竹管、ナデ、ヘラ削りにより調整。部分を仕上げ貼り付ける	橙 7／6 Hve 7.5YR	橙 7／6 Hve 7.5YR	
20	土製品	如来形坐像	110	—	—	—	舟形光背呈す、薬壷は認められないが、薬師如来と考えられる。	黄橙 8／8 7.5YR	黄橙 8／8 7.5YR	
21	瓦器	丸瓦	77	—	—	—	内面は布目痕があり、縁部はヘラにて調整、外面は縦方向にヘラ削りを施す。	灰白 8／1 5YR	黒褐 8／1 5YR	
22	瓦器	丸瓦	38	—	—	—	縁部にヘラ切り痕、外面に面取りの調整あり。	褐灰 4／1 10YR	黒褐 3／1 10YR	
23	瓦器	丸瓦	5－2トレンチ	—	—	—	縁部は面取りを行ない、縦方向へヘラ削りを施す。外面は縦方向にヘラ削りで調整。	黒褐 2／1 5YR	黒褐 2／1 5YR	

表2－(？)隠山遺跡遺物観察表

第Ⅲ章　ま　と　め

隠山遺跡を舞台にして、人々は縄文時代から近世時代にかけて生活の営みを演じていた。ＡＴ堆積以降、約15000年前にこの地で最初に活動した証と推測される石器が登場する。さらにカシワバミやアカホヤが降下堆積した縄文草創期には、ほぼ現在の地形ができあがっていた。当時を偲ばせる爪形文系の土器が集石遺構から発見され、段丘の周辺部に位置している。また、性格不明の土壙を数箇所から確認できた。しかしその他に住居関係の遺構はなく、対岸の段丘上に存在した状況が伺われる。段丘上は、ＡＴ（２次堆積）層で、遺構の大半は、層から検出できた。このことは、シラスの侵食の激しさを物語っている。

近世になると柱穴（根石を伴う）によって構成される建物跡及び集石墓が段丘北面を中心にして建ち並んだ。集石墓からは陶磁器が出土したが、火葬の証の一つである炭化物は確認できなかった。従って土葬による埋葬が最も可能性が高いと考えられる。柱穴内の出土遺物は、陶磁器類である。建物は２棟ありその内の建物跡Ⅰに瓦堂及び舟型光背、いわゆる仏教関係の建物が２棟出土した。墓制は、墓地が町周辺に点在していた中世期から寺院を含んだ取り込んだ近世期へと移っていく。隠山遺跡の場合も集石墓が、寺院と想定される建物遺構Ⅰ・Ⅱ周辺に10点ほど確認できた。建物遺構と集石墓の出土遺物は、共に中世末から近世期にかけての陶磁器類が主を占める。時期的にはほぼ同時期と推定されるが、建物ⅠとⅡあるいは、集石墓との関係など細かな点については分析作業はおわっていない。

今後の隠山遺跡の調査整理は、古代から近世にかけて特に交易用または往来用としての道のあり方を探ることを中心に進めていきたい。この作業が、隠山遺跡の歴史上での位置づけを可能にし、さらには下村古窯跡群の実像へと近づけるのである。

佐土原町文化財調査報告書
第8集
隠山遺跡概要報告書
発行年月日　平成5年12月20日
発　　行　宮崎県宮崎郡佐土原町
　　教育委員会
印　　刷　株式会社　宮崎南印刷